
DROP

字紀 彦助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DROP

【Nコード】

N4101A

【作者名】

字紀 彦助

【あらすじ】

地味でやや無気力な女の子ケイがある日、秀一と白波という2人の人に出会い突然異世界ルーステラに連れて来られてしまう。新しい世界でケイは様々な出会い、経験を経て成長していく。

第一話

伝えたい事もなく

守りたいものもさしてないが

足をつける地面が突如無くなったとしたら

それは『落ちた』というのだろうか

DROP

字紀 彦助

「…あ…れ」

起き上がるとそこは暗闇だった。

私は、周りも見えないくらい暗闇で寝付いた事などないし、私の暮らす環境にここまでの暗闇はなかったと自負している。

しかしそこは暗闇だった。

「またか…どうしたのかなあ」

そう、これが最初ではないのだ。私は毎日のようにこの『夢』を見る。白昼夢ではない。夜、布団に入り、眠りに就いた後見る夢の事だ。はっきりとした事はわかっていないけれど、とにかく意識がある限り小さな頃から、私の『夢』といえどこれしかなかった。眠りの中目がさめ、しかしまだそこは眠りの中。目がさめるのは周りの奥行きさえ確認できないほどの暗闇の中で、私はまた仕方がなく夢の中で二度寝をするのだ。自分でも、普通の人からは離れた夢だと思う。

だからといって私はとても特殊な職種に就いているわけでもない。普段は普通に学校へ通って、月並みの生活を営んでいる平凡な女子高校生だ。だから私はこんな夢を見る事に多少なりコンプレックスを感じ、自分は他人とは違うのだろうかと悩み、普通の夢が見れたらどんなにいい事かと思っていたのだ。そしてその願いを受け入れられた事は過去一度もなかった。

私は少しの虚しさを感じながら、闇の中でまた目を閉じた。

翌朝、私が目を覚ましたのはちゃんと布団の上だった。

いつもの朝だ。今日も平和だなあとぼんやり考え、学校へ行った。通学に使うJR線の窓からは高いビルや汚らしい看板、ごみだらけの裏道や電信柱にたむろする街鳩たちなど、いつも見る東京の街の景色が見え、全て流れていく。

スーツと制服にまみれたこの密室でも、これが現実で、夢ではないと思うととても幸福に思えた。

学校の最寄り駅に着くと、私はたくさんの中を掻き分けて密室を脱出した。

改札に定期を通すと私は南口に向かって歩いた。駅を出て10分ほど歩くとそこは私の通う高校だ。

校門に立っていた先生に挨拶をして校舎内に入る。玄関に着いたら下駄箱に革靴を押し込んで緑色のラインの入った上履きに足をつっかけた。階段をのぼって廊下を歩き、教室のドアをガラガラとあけると数人のクラスメイトがこちらに目配せをし、そのまた中の数人が私に「おはよう」と言った。人数分それを返し、自分の席に座ると無意識に腕時計を確認する。ゆっくり来た割には余裕があると少し喜びにひたり、クラスの中でも仲のよい美由ちゃんの席のほうを見た。おや、いないなあと思ったとき、背後から手が伸びてきて私の目を覆った。

「だ〜れだ」

美由ちゃんである事は明らかだった。畜生、高校生にもなって可愛い事してくれる、と、美由ちゃんの手をどかしながら

「びっくりしたあ」

と私は言った。

「オハヨ、桂ちゃん。今日はちよつとだけ、早いね。」

ちよつと、のところをいやに強調して言われた。

「まあ、ちよつとだけ、ね。電車の接続がよかったんだよね、たまたま。」

「いつもその電車でくればいいのに」

「どうして？」

「だっていつも、朝桂ちゃんって結構ぎりぎりになるからあんまり話せないんだもん」

多分この子には生まれつき、『可愛い』の遺伝子が他より多く入っているのだろう。でなければ私が余程の薄情者ということになる。

「あと5分早く起きるのが、難しいんだよねえ」

「その気持ちわかる。でも1回無理やり起きちゃうと後は結構楽しいよ。桂ちゃんも明日からはこの時間に起きるの辛くないかも知れないよ」

「だといいね。私もこっちのほうが余裕あって楽かも。あ、あと3分くらいで始業じゃん。教科書出してないや。ごめんね、じゃ。」

「うん」

こうして私の平和であろう一日は始まった。

授業はあつという間にこなされていく。実を言うと私は勉強をしているわけではない。これまで広げた教科書には焦点をあわせた事すらなく、先生のおでこやネクタイの模様を凝視しながら意識を宇宙に飛ばすことにもつぱら時間を潰してきた。まあこれでしかられるような点数は取らないあたり、なんて都合のいい生き物だと自分でも良く思う。いつかしつぺ返しがくるかなあなんて思う事もあるが、叱られさえしなければ私にとって点数なんてどうでもいいもののなので今のところはこのまんまで良いと考えている。

何て、ちゃんぽらん。中学校の頃の卒業文集に、私の性格についてあるクラスメイトに「頓着が無い」とかかれた事も今になっては納得がいく。

「桂ちゃん、いいの？ 帰りのしたくしなくって。」

美由ちゃんの声で気がついた。時計を見るともう終業時間だった。

「あ、ごめくんぼーっとしてた。ありがとね。ロッカーにしまわなきゃ」

帰宅部の私は部活動もないので放課後はまっすぐ家に帰ることが出来た。

自宅。帰るとお母さんが「おかえり」と声をかけてきた。わざわざ玄関まで出迎えるような事はしない。いままでもそうだったし、これからもずっとそうだろう。「ただいま」と言うと、玄関のすぐ右手にある自分の部屋へ入り、鞆を置いて制服を着替えた。

うちは父・母・私の3大家族だ。これといった欠陥もないし問題も無い。平均的でまあそこそこに幸せな家庭だ。溢れるような愛を感じた事こそ無いが、今のところ見捨てられもしていない。父と母も離婚しない程度に仲も良く、実家と縁を切られたりということもない。だから私は不満を抱いた事もないし、反抗期と言うほど両親に激しい感情を抱いた事はなかった。

ただし、ずっとあの『夢』に対する不安を背負って生きてきた。

「桂、ごはん。」

提出しなければならぬ課題をしていたらお母さんに呼ばれた。時計は7時を指していた。そういえばもうご飯時だった。

「今行く」

私はご飯を食べ、お風呂に入り、残りの課題をさっさと済ませるともう眠った。

色はうねっていく。

そこに私は希望と言うより危険を感じ、目を細めた。痛い。どこをみても色しかない。しかも、ものすごい極色彩。

私はなす術も無くおろおろした。真っ暗な夢がそうでなくなるのはかねての願いだっただがこういうものではない。これが毎晩続いたらどうしたらよいのやら。きっと1週間と持たずに精神に異常をきたすに違いナイ。真面目、勘弁して下さい。

そして景色のうねりは最高潮に達し、私まで揉み洗いされるんじゃないかってくらいになってきた。その活動は本当に活発で、大きく動くたびに音まで聞こえる。

「あれ……」

（そのうねりの音、なんだか喋り声にも聞こえる。）

私は本能的にそう思った。そして気づいた頃にはその音を聞き取る事に私の全身は集中しきっていた。

———シューイチ。シューイチ。

———アイタカッタ。アイタカッタ。

———シューイチ。シューイチ。

———アイタカッタ。アイタカッタ。

しゅういち？会いたかった？？」

しゅういち？修一？秋一？秀一？

その前に、私の知り合いに「しゅういち」という男（もちろん女も。ひいては、犬猫その他も。）はいない。

大体会いたかったということはもう会ったか、会おうとして会えなかったかのどちらかになる。私はしゅういちとやらに会おうと努力をした事はなかった。

夢が現在の自分を写す鏡なのなら、これはまるでおかしいことである。必死に思い出そうとするが、ヤル気に反比例し私の頭はぼやけていって、意識が夢のまた奥へ落ちていった。

翌朝。

今日は日曜日なので学校は休みだった。

といっても結局特にする事はない。テレビゲームをしたり、だらだらして一日を潰すだけだ。

部屋の小さなテレビの電源をつけ、ゲームをつなぐ。入れたディスクは最近集中的にクリアを目指している超長編RPGだ。長すぎて、まだ最初のほうなのかそれとも中盤なのか、もうすぐ終わりなのかもわからない。まるで人生のようだ。

一番面倒なのは所謂中ボスという奴だ。どうせ大きな鍵を握って居るでもないのにいやに強敵で、倒せないと一步も前に進めなくなる…。

私にとってあの夢は、最後のボスなのか、それとも単なる中ボスなのか。

中ボスだとしたら、あの夢を克服すればそのために15年間滞ってきた私の物語は先に進むのか。

わからない。

目の前のテレビ画面で、中ボスである素晴らしい程巨体の化け物が大声を上げて倒れた。

ゲームの内容が一区切りついたので私は散歩に出ることにした。

それほどいい天気でもないし近くには公園も無いのだが動かないよりはましだ。

とりあえず本屋にでも行ってみようかと歩き出す。車道は混雑していて、歩道には自転車走り回る子供たちがたくさん居る。どれもこれも近所の子供なのだが、高校生になった今現役小学生で顔を知っている子は、めっきり居なくなってしまった。

そうしてしばらく歩いていると、前方に居た男の人とすれ違った。それだけならたった今まで何回も同じことはあったわけだが、彼

は違った。

「：秀一：？」

すれ違いざまかけられた言葉。少し低くて掠れたような声。それが私へ向けられた言葉だとわかるまでにはかなりの時間がかかった。

「秀一だな？：お前、どれだけ手間かけさせれば……！」

しゅーいち。いい年齢の男にいわれの無いことで凄まれて恐怖感を覚えながら、その名前はあの夢に登場した名だと心が不思議な期待に包まれた。

しかしまず、私は秀一ではない。

「え、っと：あの、人違いです。私秀一じゃないし」

「：は？しかし、確かに……」

「似てるんですか？そんなに」

「いや、まるっきり違うが」

「まさか、女装が趣味とか」

「それはありえない」

じゃあどうして間違えたのだろうか。共通点も何もあったものではないと思うのだが。

「じゃどうして……」

「雰囲気があんまり似ていたものだから……。人違いか。なら悪かったな、急に怒鳴ったりして」

最後のほうはやや不明瞭に、早口になっていった。それにしてもよく見ると並よりは整った顔をしている。“よく見る”まで気づかない程度のものだが。

「いえ、全然気にしてないです。探してるんですか？その秀一って人」

「まあ、な。脱走癖さえ無けりゃ：って無くてもいろいろ問題のある奴だが」

「早く見つかるといいですね」

「ありがとう。じゃあ本当に悪かったな」

「いいえ。それじゃ」

彼のうしろ姿を見送ると私はまた本屋へ向かって歩き出し、散々立ち読みした後帰ったのは昼ごろだった。

夜。12時近くだろうか、昼買った本を読んでいたら半分開けた窓の外から話し声が聞こえた。

「……………！」

「……………」

何を言っているのかはわからない。本読むのにジャマだなあと思っていると片方の声がどこかで聞いたような気がしてきた。

少し低い、時たま掠れる：

ああ、昼に会ったあの人だ。

思わず窓際に耳を寄せると、すぐそこで話しているのか会話が鮮明に聞こえる。

「で？あの女の子にどう責任を取るつもりだ」

「それはあの子に聞いて見なけりゃわからないだろう」

「まさかあの時の子がまだ生きていたとはな…」

「普通に暮らせているんならいいんじゃないか？それで幸せなら」
確かに片方は昼間会った男の人で、もう一人もおそらく同じくらいの年の男だった。

「どちらにしたって早く帰るぞ。お前の不在で一番迷惑がかかっているのは他でもない、我が君主なんだからな」

「わかってるさ、俺だってあの方を煩わせ過ぎる気はないよ」

少しだけ窓から外を見てみると、昼間会った黒い頭の人の向かいは驚いたことに白髪…、いやあれは銀髪というのだろうか、の人だった。しかし明らかに年は20そこそこである。

あ、あれは秀一だ。

私は考えるより先にそう思っていた。冷静に考えても昼間会ったあの人は“秀一”を探していたのだからあれから10時間以上過ぎて誰かと会っているといえば“秀一”である可能性は高いわけだ。しかし私はそういうことを考える前にあの極色彩が頭を埋め尽くしていくのを感じていた。

そう、今まで真っ暗だったあの夢の中だ。

目を閉じると本当に吸い込まれてしまいそうだ。蛍光イエロー。シヨッキングピンク。動脈の血のようなレッド。ブルー。グリーン。パープル。オレンジ。それらが一定のリズムに合わせてうねっている。

―シューイチ。シューイチ。会いたかった。

―会いたかった。シューイチ。会いたかった。

―シューイチ。会いたかった。シューイチ。

――シューイチ。会いたかった。シューイチ。会いたかった。

会いたかった！シューイチ！会いたかった！！！！

シューイチ！！会いたかった！！！！

シューイチ！！！！会いたかった！！！！

「シューイチ！！！！会いたかった！！！！」

はたと気づくとあの極色彩は消え去っていた。シューイチ、会いたかった、という言葉は頭の中で大きくなっていった、自分でも口と心のどちらで叫んだのか覚えても居ないほどだった。ただ、その男2人が驚いた顔でこちらを見ているのがわかった。

どうやら口に出してしまったようだ。

なぜだか恥ずかしいというよりは「吐き出してやった」という達成感の方が強いらしく心の中はいやにスッキリ爽快だった。

「…あの子、俺を覚えているはずないよな」

「たぶんな。覚えていても名前を知っているはずが無い」

「でも、もしかしたら、知っていたかも知れないよな？」

「連れて帰るつもりか」

「あの子が望むなら、な」

会話が読めない。ただぼーっとしている私に、目の前の男2人は話しかけてきた。

「名前、何て言うんだ？」

「…桂。真田桂」

「ケイ、か。俺のこと覚えてるか？」

「ううん。」

「そうか。今、幸せか？」

「う…ん、まあ、そこそこ」

知らない人間のはずなのになぜこんなことを聞いてくるのか。

しかし今は確実だ。

彼は秀一である。

「あなたは、秀一？」

「そうだ。覚えてないなら、どうしてわかった？」

「なんとなく。それから、夢で」

「夢？」

「生まれてから、ずっと、真っ暗闇の夢しか見たこと無かったんだけど、昨晚はすごい色だらけの夢を見て、“シューイチ、会いたかった”て聞こえたの」

「…そうか」

秀一は、少し複雑そうな顔をした。

「なあ、桂、こっちに来ないか。俺たちの世界に」

「俺たちの…世界？」

「…イチから説明するのは面倒なんだが…」

その時、パタパタと廊下を歩いてくる音がした。

「桂ちゃん？どうしたの、大きな声出して」

お母さんだ。確かにあれだけ大音量で意味不明なことを叫べば不審がるに違いない。

「ケイの母親か」

「バレたら面倒だな。なあ、飛び降りられるか」

「へ？」

飛び降りる？この高さから。といっても2階だから打ち所が悪くない限り死にはしないだろうが。

「ケイ。お前は这个世界とズレを感じないか。触れるもの、聞こえるもの、感じるもの、空の色、そして全てに。这个世界でお前が幸せで、何か執着があるのなら無理には勧めないが…、そうでないならここはお前にとってきつと生きにくい場所だ」

お母さんが、部屋のドアをノックし始めた。
もう時間はない。

この2人の言っていることは理解しきれないが、決断するのは今だ。

「そっちの“世界”に行ったら、…カラッポな夢は見なくなる？」

「カラッポな夢？」

「起きると何も無い暗闇で、また寝るしかない夢。」

「…絶対とは言えないが、見なくなるだろうな」
ドアノブが回る音がした。

「桂ちゃん？ 入るわよ」

行かなくては。今お母さんをここへ入れたら、全てが終わってしまう。
う。

「行く！ そっちへ行くから！」

私は窓へ片足をかけると、もう何も考えず飛び降りた。

第二話

「……」

意識が浮上する。いつものパターンなら、どうせ目を開ければ暗闇なのだろう。私は目を開ける気になれなかった。

しかし、耳を澄ませばかすかに物音がする。

街であろうか、たくさんの人々の声と、人のたてた音が折り重なっている。

そうだ、私は私の部屋の窓から飛び降りたのだった。

今更ながらにそれまでの経緯を思い出すと、まるで幻のようだ。

突然見知らぬ男2人と出会い、一般常識では測れもしないであろう選択を強いられ、しかも私はそれを受け入れた。

これで目を開けたそこが病院だったりした日には大笑いである。いやそれどころか、ひとしきり笑った後に違う種類の病院に行く必要があるだろう。

…それはできるだけ勘弁したい。

しかしここで目を開けようと開けまいと目の前の事実が変わらないだろうと思い、私は重いまぶたを押し開けた。

途端、予想だにしない光が眼を直撃し、意識する前にまぶたが再び閉じる。

「目が覚めたか、ケイ」

秀一では無い方の男の人らしい声がかかる。一応彼らの存在自体は幻でないらしい。

「ん…まぶし…」

目が慣れてくると以外にたいした光ではない。というか蛍光灯ほどの毒々しさはない。

どうやら窓から差し込む太陽光のようだ。

「あいつ、ガラにもなくトチったな。きっと今頃あいつだけ城だ」
秀一ではない方の男の人が誰にとなく言って、私が寝ているらしいベッドから少し離れた椅子から立ち上がった。そしてゆっくりこちらに歩いてくる。

私もいつまでも寝転がっているわけにはいかなかったので上半身を起こした。

見回すとそこはとりあえず病院ではないようで、ほんと胸をなでおろす。

しかしその建築様式は明らかに現代風ではないし、科学の産物のような物体は何一つ置いていない。

私はとっさに、小さい頃読んだピーター・ラビットの絵本を思い出した。そう、この家は、その絵本に出てくる家に似ている気がする。「えっと、…」

私は目の前の、秀一でないほうの男の人を見た。そういえば私はこの人と呼ぶ名前を知らなかった。すると向こうも察してくれたようで、

「名乗るのを忘れていたな。俺は、風姿 カザシナ・シラハ 白波…白波でいい」

白波は背は恐らく175センチくらいだろうか。外見的には23〜4歳くらい。真面目そうだが穏やかな感じの顔立ちで、少し長く黒い前髪の下には澄んだ純黒の瞳があった。そんなにゴツイ体型ではなかったが、何か運動をしている体だということはわかった。

「ん、白波。で…」

次の私の疑問はここはどこなのか、ということであったが、白波はそれも先回りして理解してくれたらしい。

「ここは、俺たちの住む世界。…ケイにとっては突飛過ぎて理解しがたいかもしれないが、ここは地球ではない。…ルーステラと、呼ばれている。ついでに今いるところは俺たちが学生の頃隠れ家に使っていた空き家だが」

「ルーステラ…」

私は意味も無くその固有名詞を暗唱した。秀一は、ついてくれば黒い夢を見ない世界を見せてくれると言った。ならそこが地球でない可能性も確かにあったが、これではまるで、というかそのまんま、オカルトかSFの類ではないか。

「普段は、地球とルーステラは全く無関係だからこうやって接触することはないし、もともと接触してはいけないんだが……」

白波は、説明するのが難しいというような顔をした。そして開き直ったように、

「……理屈を話し始めるとキリが無いし、突然込み入った話をされても理解ができないだろう。」

確かにそうである。その昔、かの“マトリックス”の設定さえ理解できなかったことを思い出した私は素直に頷いた。

それに、私が秀一を呼んでいたということは分かったが、私と秀一の関係はまだわからない。今のところ謎だらけである。

これが現実なのかということさえ。

「まずは、外に出ていろいろ見ながら教えるか。……その服、こちらでは珍しすぎるから着替えたほうがいい。」

そうか、きつとポリエステル100%、なんてありえないんだろうなあ……と私は着ている水色のロゴがプリントされたパーカーをつまんだ。そこに、白波がきれいにたたまれた服を手渡してくる。

広げるとそれは白い袖なしのワンピースで、膝丈ですこしフレアっぽいスカート部分の右側にピンクや赤の花柄が付いていた。何系かといわれればお嬢系……?といった感じだった。

「さっきケイが気を失っているうちに買ってきたんだが……気に入らなかったか?」

突然会った人に対してずいぶんと親切な人だ、白波は。

「ううん、かわいいいっ。ありがとう」

思えば白波に言わなければならぬありがとうはまだたくさんあるはずだ。ま、出世払い(?)でことで、この場は許してもらおうという。

「じゃあ俺は外で待っているから、着替えたら出てきてくれ。」

「うん。」

私は一人でワンピースに袖を通しながら、こんな服なのだから外はきつと夏なのだろうと予想していた。こんな家のあるところなのだから、外は一体どうなのだろうか。まさかコンクリート敷きではあるまい。他の家もこんな調子だったら、きつとどんなに素敵な街だろうか。：早く見たい。

そして着替え終わり外に出ると、季節に関する自分の予想は外れていないことがわかった。日差しは強い。

というか大抵の予想は外れていなかった。確かに町並みの建築様式はほぼ統一されていて、壁は土かレンガ。たまに木造もあったが。看板のある店らしき家も沢山あったが、その文字は私の読めない言葉で書いてあるので何屋なのかはわからなかった。道はレンガのところもあれば、踏み固められた土のところもあり、人通りは多かった。よく見ると猫のような耳の生えた者、硬そうなうろこを持つ者、白い翼を持つ者、あと白くふわふわした生き物などもいた。そしてそこから目線を上げると家々の向こうに小高い丘があり、そのてっぺんにあるのはどうやら城のようだった。地球では遺跡でしか見る事の出来ないような立派な城だった。そこから考えるとここは城下町らしい。

私は驚きと喜びと、あと何と言ったら良いのか分からない大きな感情でしばらく黙って突っ立っていた。

しかし少し冷静になってみると、ここまで私好みの世界観だとかえってやはりここは夢ではないかという線が強くなる。

「終わったか」

思考の世界に引きこもっていた私は隣の白波の存在を忘れていた。はっと白波のほうを向くと取り敢えず場がおかしくならない程度に言葉を紡いだ。頭が完全に目の前のことに戻るまでの場つなぎはま

るでオートで動くもう一人の人格が行っているようだった。

「うん。ぴったりだったよ。ありがとう。あの、さっきまで着ていた服って…」

最後のほうからは完全に目の前に戻った私が喋った。

「そうだな、中に手提げ袋かなにかあったと思ったが」

それは私に、というよりは自分に対して喋ったようだった。言いながら家に戻り、少し引き出しなどを探る（音がする）。

しばらく、ほんの数十秒して、

「あった。これを使うといい。」

と布袋を差し出された。私はお礼を言うと、受け取った布袋にさっきまで着ていた服を入れた。

「じゃあ、出かけるか。とりあえず、あの・・・上に見える城がわかるか？あそこへ行く。」

あの、丘の上のきれいな城だった。

「え…っと…どうして？」

いや、右も左も分からない私が聞くべきではないのかもしれないけれど。でもやはり気になったものは聞かずにいられない。

「悪いな、歩きながら話すが…」

そういつて白波は歩き始めた。私も歩き出したが、白波の歩幅が思ったよりもずっと広く、ただでさえそう身長の高いわけでもない私は何だか飼い主に合わせてシャカリキ歩くチワワのような気分になった。そして、すぐそれに気づいた白波はわざわざ歩幅を短くしてくれた。お陰でチワワな気分から、せいぜいビーグル犬くらいの気分になった。そして白波は、一呼吸を置くと喋りだした。

「ここは、ルーステラの中のマークザスという国。あれがマークザス城で、ここは城下町だ。つまり国の中心だな。そして、他の国では違うところも沢山あるが、この国では国家の重役の者は大抵城に居住している。」

まあ王家を主として、政治家や兵士、それと下働きの女中の寮も城内だな、と付け足した。

「そしてその中には兵隊も含まれている。兵隊には歩兵隊、弓兵隊、騎士隊、魔導士隊の4つと、それから軍医がある。俺は、騎士隊隊長の補佐をしているんだ」

「それって結構すくない？最初見たとき何か運動をしていそう、という印象はあったけれど、まさか軍人さんだったとは。あれ？つてことは…。私の頭の中に一つの仮説が浮かんた。

「ね、もしかして隊長は…」

「勘がいいな？秀一だよ」

あっさり、私の勘が当たっていたことを肯定される。ちょっとうれしかった。そして自然にこの先白波の言いたいことがわかった。

「ああ、でつまり、二人はマークザス城に住んでるってこと？」

白波はこちらを向くと頷いた。

「平たく言えばそうだな。それで、秀一は向こうからこっちに戻る時マークザス城に行くつもりだったが失敗してあんな適当なところに落としたんだろ？俺たちだけ」

今度はわけがわからなくなってしまった。

「戻る…？失敗…？落とす…？」

ポポポンと私の頭の上にクエスチョンマークが発生した。恐らく、ここにはまず概念から学ばなければならぬことが山ほどあるのだろう。うーむ、頭を柔らかくして物事に取り組まねば。

「…それは秀一と合流してからゆっくり話そう。とりあえず、城に向かう理由はわかったな？」

「うん、ありがとう」

とにかく今考えてもしょうがない。深く悩むことでもないだろうし…、第一なにがあらうと死ぬわけじゃない。…だろう、多分。

いつの間にか白波は歩き始めていて、私は急いでその背中を追いかけた。

第三話

しばらく歩いた後、私と白波はマークザス城にたどり着いた。マークザス城は白のような灰色のような石で出来ていて、豪華な感じではなかったけれど荘厳な品格をかもし出していた。城門には猫のような耳が生えていて鎧を着けた番兵が2人槍を持って立っていた。とても大きく高さが私の身長の3倍くらいはある城門は開いていて、番兵はあくまで不審人物が通らないように見張っているだけのようだった。

「カザシナ様、お疲れ様です」

番兵が親しみを込めて言った。その態度から、白波が慕われていることがわかる。

「そちらもご苦労様。」

白波も応じた。すると番兵は不思議そうな目で私のほうを見、

「その少女は…?」

ギク。一体何と答えればいいのか。あ、怪しまれないためにも挨拶はしといたほうがいいのか…??

「こ、こんにちは…」

ていうか親子ほど年離れてないし恋人には年離れ過ぎだし、兄妹っても家族関係くらいばれているだろうし。知り合い…ってかそれは本当に知り合いなんだけども。どちらにしたってこの状況では私が喋っても信憑性ないだろうし、白波に誤魔化してもらうしかない。

でも白波って真面目っぽいし、嘘つくの下手そうだなあ…と、途方に暮れた時。

「俺の親戚だ。マークザスは初めてだから、案内して回っている」
余りにも自然な喋り方なので最初気づかなかったが、白波がペラペラと嘘を吐き出したではないか。

…おお。随分いけしゃあしゃあとまあ…。そこまで真顔で言ってい

るとまるで私が本当に白波の親戚みたいな気がしてくる。

「そうでしたか！ああ、確かに少し似ていらっしゃる。お名前は？」
番兵は気づかない。あれで気づくのは嘘発見器ぐらいのものじゃないだろうか。

「あ、真田桂、です。」

もう別にいいや。白波が親戚で。

「ケイさん。どうぞマークザスを楽しんでくださいね」

「はい、ありがとうございます」

と、とりあえず番兵をごまかして城の敷地内に入る。突然建物な訳ではなく広い庭があつて、一般開放でもしているのか子供が普通に遊んでいる。

それにしても。

「白波：って嘘つくの下手そうに見えたのに」

私は思ったことを小声で言った。

「確かに嘘は苦手だが……。でも大の大人が、苦手だからといって嘘をつかなければならない所で嘘けないじゃ情けないだろう」

白波も小声で返す。

「それにケイと俺は髪と目の色が一緒だったから“親戚”は一番自然なネタだった」

確かに私は平均的日本人だから白波ほどきれいな真っ黒ではないが目と髪は黒い。白波のほうもどことなく日本人に近い顔立ちだし、親戚ネタが一番それっぽいのもうなずける。

「そっか。あ、でも隠し子とか言い出さなくてよかった」

「なッッ！？」

白波は目を丸くした。一瞬、肩までビクつかせたような気もする。もちろん冗談だったのだけれど、そのオーバーな反応があまりに面白くてついつい続けたくなってしまう。

「でも白波って多く見積もっても25歳だよね。で、私は15歳だから：10歳？ありえな〜っ」

一人で笑っていると白波は少しムツとした顔になった。さすがに大

人、しかもさつき会ったばかりの人をからかうのはまずかっただろうか。

「…俺は23だ。8歳なんてますますありえないだろ。お前、そういう所秀一に似てる」

「へ？」

思ったより怒っていない白波にほっとしながら、私は台詞の後半について疑問を投げかけていた。

「そうやっていつの間にか俺を喋らせている所が、な。良くも悪くも」

良くも悪くも、すか。

「白波ってそんなに喋らないの？」

「…あんまり、な。昔から回りにそう言われる」

そういわれてみれば、さつき私がこっち（の世界。ルーステラというらしいが）に来たとき必要な情報を教えてはくれたが、軽口をたたくようなことはしなかったし、むしろ何か喋らなければと慌てているようでもあった気もする。

「じゃあ、秀一はよく喋るほうなの？」

「まあ…、俺よりはずっと社交的だろうな」

そんなことを話しているうち、城の建物の前に着いた。目の前に立つと、遠目に見たときよりずっと大きく感じる。扉は閉じていて、さつきよりずっと強面な番兵が何人も立っていた。さすがにここをごまかして通るのは無理そうだ。

「さて、ここから先は、関係者本人以外は一般公開の日か学校の社会見学でもない限り入れない。秀一呼んでくるから、その辺で待っていてくれないか」

「わかった」

白波が扉の向こうへ消えて行き、私は少しキョロキョロした結果、城の扉が正面に見えるベンチに座った。

ベンチ、という事実をナチュラルに受け止めた後、私は今更な

が不思議に思った。

―どうして、別世界^{らし}に來ているのに地球と同じようにベンチがあり、そして地球の常識で受け止められる範囲の文明が存在しているのか。途中で見た耳の生えたりしている人はともかく、なぜ白波や秀一、その他もろもろは人間とほとんど（というか全く）一緒なのか。いや、耳の生えたヒトにしろ、どう見てもベースは人間と同じ型だ。それ以前どうして普通に会話できているのかが怪しい。異世界ルーステラ、公用語・日本語。…ありえねえ〜。

―でも、地球人には到底想像もつかないようなところやヒトでも困るな。いきなり言葉っていうより怪音波？みたいなので話しかけられてもどうしようもないし。大体それじゃ私の合意がないから“異世界に來た”つーより“何かめっちゃくちゃなところに拉致られた”て感じだろうし。あー、『ルーステラ』がまともなところだよかった。白波が親切な人でよかった。

「あの、白波の親戚のヒト…？」

「へっ？…あつ、はい」

突然話しかけられて、私は答えるまでに何とも間拔けな時間を要した。

というのも、まず考え事をしていてまわりの音がきこえなかったので一瞬、そして『白波の親戚のヒト』が私であることを思い出すまでまた一瞬。合計二瞬、反応が遅れたわけだ。

「わあ、私、白波の親戚初めて見たわ！」

声の主は、12歳くらいのちいさな女の子だった。庭園入り口の番兵と同じように猫のような耳（番兵は黒い耳だったけれどこの子は茶色だった。）があつて、白地に青のだんだら模様の付いた麻のワンピースを着ていた。そして手には何故か杖のようなものを持っていた。もちろんそのようなものを使わなければ歩けないようには到底思えない。アンバランスだなあとぼんやり思った。

「あ、ごめんなさい。私、リスパユ・リパンユっていうの。リップって呼んで！」

「リップ？ よろしく。私は真田桂。」

恐らく私のほうが年上なのだが、（敬語かどうかという問題ではなくて、）年上に向かって話している、という雰囲気がない。リップはそういうことを余り気にしないタチなのだろうか。

「あのね、私この国で魔導士隊長やってるの。だから白波とは同僚っていうか、友達っていうかなんだけど」

魔導士隊。軍隊の種類として白波が言っていた。魔導士っていったらやっぱり魔法でびやびや〜とやる人なのかなーと思っていたが、まさか隊長がこんな小さい女の子だとは。この年でそんな管理職ってことは、きっと超、じゃ足りないような天才なんだろう。というか普通物理的に無理だ。でもそれで、手に持った杖の意味が分かる。

「白波ってもとものと遠い国から来た人でしょ？ それにあんまり身の上話するタイプじゃないから、だあれも親戚のこととか、知らないの。あ、ケイちゃんて呼んでいい？」

ケイちゃんと呼ばれて、急に私のことをそれと同じ呼び方をしていたクラスの美由ちゃんのことを思い出した。今、どうしてるんだろう。私がいなくなっぴっくりしているだろうか。

「うん、全然。」

否定する材料は一つもない。否定したいわけでもない。

「じゃケイちゃん。ケイちゃんは、白波の何にあたる人なの？」

親戚縁者の関係をだれも知らないということとは、いとこと言っておけばとりあえずツブしが利くだろう。

「あ、いとこなんだ。」

でも白波について突っ込んで聞かれたら答えられないので、

「でも会ったことなく、実はちゃんと話したのはこっちに来てからなの」

と付け足しておく。：我ながら自分のアドリブには感心するよ。

「そっかあ…。じゃ白波のちっちゃい頃なんて、しらないのか」

「ゴメン…。」

「えっ、全然。謝らないで！ただ、あの真面目の権化の白波が赤やんの頃はどうかだったのか、ちょっと興味ない？」

やっぱり白波は真面目キャラだったのか。しかも“権化”と付く程の。確かにあの理性の塊そうな人の、理性が芽吹く前というのはかなり気になる。

「…確かに気になるねえ」

「でしょでしょ！？きつと…」「…誰の何が気になるって……？」

…、その声は、まさかまさかの…。

「白波！？」

私の心に思い浮かべた人物を、リップが口に出した。喋ることに夢中になっていて気づかなかったが、白波はすでに私たちの目の前に立っていた。逆光になっているのがますます怖い。

「…ケイ、秀一連れてきたぞ。」

軽くため息をつきながら白波が言った。そこに、白波の少し後を歩いてきたらしい秀一が視界に入った。

秀一は、やっぱり初めて見たときと同じ銀色の髪をしていて、細い髪質のそれは肩に着くか着かないかまで伸びていた。段も付いていないので普通にセミロングに見えるが、それでも変な印象は受けない。そして、瞳は少しだけ紫がかった青で、何よりあるべき場所にあるべきパーツが存在しているような顔には、地で自信にあふれているような雰囲気漂っていた。しかし高慢、という感じでは決していない。白波よりずっと融通の利きそうな人だった。

「よ、面白そうな話してたじゃねえか。」

話のタイプも白波とは対照的だ。

「でしょ、秀一！でも白波に見つかっちゃった」

リップが普通に、私に話すのと同じトーンで秀一と話した。やっぱりリップは、話す相手に態度が影響されない子らしい。

「そうだな、今度からは本人に口を挟まれないところで話したほうがいいな。ところでリップ、魔導士隊のやつらがリップのこと探してたぜ？」

秀一が親指で城を指差した。リップはだんだん、マズい!! て顔になって慌てだした。

「あゝ!! そうだった! すぐ戻るって言って出たのよね! 行かなくちゃ。じゃあね、ケイちゃん。お話できて楽しかったよ」

まくし立てるようだが挨拶は欠かさない。

「うん。こちらこそ。」

「じゃね、秀一、白波。」

「おう」

リップが走って城の中へ行った。秀一はふうっと息を吐き、

「あれ、デタラメだったんだけどな。たまたま合っててよかったぜ」とあっさり抜かす。：嘘キングここに発見せり。

「さて、ケイ。：と白波。悪かったな、いや本当に突然飛び降りるとは思っていなかったから頭ん中整理し切れなくてな」

「それでなんだけど、どうして：」

言いかけた言葉を言葉で制止される。

「ケイの聞きたいことはわかるけどな、まず場所を変えよう。ここじゃさすがにマズい」

「：そうだな、一般市民に聞かれていい話題じゃない」

白波も賛同した。確かに普通の人に聞かれて全然構わないような話じゃないけれど。

「んじゃま、人に聞かれる気遣いがなくてここからそう遠くないところ：って言ったら：」

「：ニトロ先生か、キルク先生の所だな」

「キルク先生には奥さんも娘さんもいる。ニトロ先生の家がベストだろ」

「そうだな」

完全に2人だけの会話になっている。何も知らない私が絡めって方が無理だけれど、やっぱり少し寂しい。

「あの：さ、ニトロ先生って：」

「ああ、ケイ、悪いな。これから、ニトロ先生っていう俺と白波の

学生頃の先生の家に行く。ちゃんと理解があるし、俺たちが信頼してる人だから大丈夫だ。またちょっと歩かせることになるけどな。」

「それは全然平気。」

すると秀一はちよつと微笑ってうなずいた。

「よし、じゃ行くか。」

「うん」

ギラギラした太陽がてっぺんより少し翳り始め、しかし気温はまだまだこれから上がるかという頃だった。その様子が余りに地球に似ていて、私は一瞬まさにここは地球であるかのような錯覚を覚えた。

第四話

「そうだ。俺の名前は太宰 秀一。ダザイ・シュウイチ 下の名前は知ってるみたいだけどな。で、まあ白波に聞いたかも知れねえが、一応この国の騎士隊隊長やってる」

マークザス城の敷地を出たあたりでポツリと秀一が言った。彼が歩くとたびに、細いけれど綺麗な銀髪が揺れた。普通、男で肩辺りまで髪が伸びていたら妙なもののだが、さっきも思ったとおり、秀一の場合は違和感が無い。何というか、下品にならないのだ。単に顔がいいというだけじゃない。秀一なら、変じゃない、と感じるのだ。秀一は秀一で、他の人とは違う。当たり前のことなのだけれど、秀一は特にそれを意識させる。体全体からにじみ出るオーラが彼を普通の人間にしておかない。華やかと言えば華やかだけれど微妙に違う、高貴と言ってもイマイチしっくりこない。でも、地味とは全く対極にあるような…。

全くと言っていいほど面識のない私でも、彼の持つ世界観というかが、空気を伝って私の脳みそに届いた。こういう人、たまにいると思う。秀一は、それをだいぶ強くした感じだ。

「で、まあ白波とはチビっこい頃からの腐れ縁。まっさか職場まで同じになるとは夢にも思ってたけどな」

「それはこっちの台詞だ。文句があるなら陛下と尋常ないお前の才能に言ってくれ」

白波と秀一が真ん中の私を挟んで話した。

「尋常ない才能？」

一応、話題に参加する。私の問いに、白波が少し眉間に皺を寄せて苦い顔をした。

「…秀一は、学生の頃はいつも成績で一位を取り続けていた。遊びたいとき遊んで、食いたいとき食って、寝たいとき寝て、おまけに毎日寝坊するような奴だった」

何というか、イメージどおりと言うか。秀一って、目に見えた努力とか汗水たらしてとか、好きじゃなさそうだ。というか、似合わないさそう。

「あの、で、もしかして白波ってすごい勉強とか頑張る優等生だったにして」

「ははっ、ケイ、観察眼あんなあ。」

秀一が笑った。白波では有り得ないような柔らかい笑顔だった。

「ま、白波は面構えから一目瞭然だよな。俺らの通ってた学校は全寮制で、しかも部屋分けは男女別の成績順で2人ずつだったんだよな。そうすると、まあ望む望まざるも関係なくずくずくと白波と同じ部屋になってたって訳だ」

「…つまり…」

秀一はずっと学年首席で、白波はずっとその次、つまり次席だったって事か。

なんなのだろうこの天才達は。まあ、よく考えれば国の騎士隊の隊長や補佐だなんて普通こんな若い年になれるものじゃない。…にしても次元違いすぎないか??

「す、すごい…。次元丸違い…」

次元ていうか実は世界がまず違うんだけど。ここルーステラ、あっち地球。

「はは、身構えんなって。ケイだってもととは…」

あ、と秀一が言葉を濁らせた。

「え、何？」

「いや、ニトロ先生の家までもう少しだからな。そこで全部話すから、もうチョイ待ってな」

秀一がまたニッと笑った。

気がつくのと、いつの間にか私たちは街を抜けて草原地帯に来ていた。綺麗な緑色の草が遠い山脈までずっと生えている。風がよく抜けるせいか、街の中よりも空気が美味しかった。

…でもこんなところに、人家なんてあるのか…?

私はにわかに疑

問に思った。

「安心しろよ。別に人気の無いところに誘い出してどうたらって程、人として落ちぶれてねえし。」

秀一がクックツと笑いながら言った。

「どうやら私は目に見えて疑わしい顔をしていたらしい。いや、私だってまさか白波や秀一がそういうことしそうな人だなんてぜんぜん思っていなかったけれど。」

それにしても不思議だ。普通だったら疑うし警戒もする。けれど、私は二人を何故か信頼しきっている。会ったばかりの人を。

「ほら、あそこ。煉瓦造りの家が見えるだろ？ ニトロ先生ん家はあそこだよ」

秀一の指の指すほうには確かに小さく茶色い家が見えた。遠くからでも、人の住んでいそうな気配がちゃんとする。

「よし、じゃあもう一頑張りだ。」

「っていうか、ここからあそこまで意外とない？ と思いつても、私は白波と秀一にくつついて行った。」

「ニトロ先生、いらっしゃいますか？」

何とかその家までたどり着いたとき（やっぱり距離があって、結構息が上がった）、白波がドアをノックしながら家の主である“ニトロ先生”を呼んだ。

国の騎士隊長補佐がバリバリに敬語を使うくらいだから、どのくらいの大先生なのかと思いきや、私の予想は見事に打ち碎かれた。

「ん…？ その声はシラハか？」

何とドアを開けて出てきたのは、三十台の前半か中盤くらいの男の人だった。白波と秀一を超える長身でガッチリした体型、髪はスポーツマンぽくハネた黒い短髪で、瞳は金色をしていた。精悍な感じで好印象だ。いや何より、特徴的なのは肩甲骨の辺りから生えた大きい黒羽だろう。色だけ見ればカラスのようなのだが、形自体は天

使の翼のように見えた。

「おお、ひっさしぶりだな！」

気さくそうに笑った“ニトロ先生”はまるで子供を扱うように白波の頭を撫でた。

：いや、『髪を掻き混ぜた』と言った方が正しいかもしれない。白波はバツが悪そうに、やんわりと“ニトロ先生”の腕を退けた。

「ご無沙汰しました。お元気：だったみたいですな」

「まあな。そっちも元気そうで何よりだ。お、何だ、今日はシュウイチも一緒か。」

“ニトロ先生”が秀一の方を見て言った。

と同時に、今まで微妙に死角に入っていたらしい私にも気づく。

「そっちの子は？初めて見るな。」

と、はは、とからかうような笑顔を白波に向ける。

「ガールフレンドか」

「っ、違いますっ！」

白波はかなり慌てながら否定した。白波は普段真面目なくせに、ちよつと突くと可愛い反応をする。からかい甲斐のあるキャラだということは、周りの人間は大抵知っているらしい。

「それがさ、まあ色々あって、どうしても話をする場所が欲しいんだ。悪いけどちょっと家貸してくれないか」

白波があれだけ敬語を使っていた人に対し秀一は明らかにフランクだ。“ニトロ先生”もそれを理解しているらしく、全く気に障った様子は無い。

「ああ、キルクも居ていいんなら、構わねえけど」

「！？キルク先生もいんのか？」

多少なり秀一が驚いた様子を見せる。“キルク先生”というと、さつき“奥さんと子供がいるからやめよう”となった方の先生だろうか。

「今日はたまたま来ててな。可愛い奥さんが、これまた可愛い愛娘連れて2人きりで遊びに行っちゃったもんだから暇なんだと」

「：そっか。ま、むしろ好都合か。もともと先生にゃ白状する気で居たしな」

今更だけど、私は見事に置いてけぼりを食らっている。そりゃあ人の人間関係にポンと飛び込んだんだからしょうがないけれど：いやそもそもが、もう自分が一体何者なのかさえ本当は秀一たちだけが知っていて、私は知らない、と思う。不思議な感じだ。意味も無く喪失感さえ感じる。

「白状？：ま、とにかく上がりな。立ち話もなんだしな」

三人口々にお邪魔しますを言い、“ニトロ先生”の家へ入った。短い廊下の先にはリビングがあり、椅子には金色の髪の毛の男の人が座っていた。他に人が居る様子もないし、恐らく彼が“キルク先生”であろう。

私たちの足音を聞いて、彼が振り向いた。スツと鼻は通っているが柔らかな印象の顔立ちで、目は水色に近い青だった。

「よう、キルク先生。久しぶり」

秀一が話しかけると、“キルク先生”はふっと微笑むと立ち上がった。身長も年齢も“ニトロ先生”と同じくらいなのだが、こちらは筋肉質な感じではなく、手足がすらりと伸びた謂わばモデル体型だった。

「久しぶり、シュウイチ。シラハくんも、元気そうですね。」

声も穏やかな感じだった。何ていうか、その辺一帯だけほんわかオーラが漂っている。

「その子は？見たこと無いですね」

“キルク先生”と目があった。ていうか、そりゃ私が聞きたい。

「は、はじめまして。」

私が挨拶をすると、キルク先生はちよつと目を細めて微笑った。ああ、この人、すごい癒し系だ：。

「ああ、その話はじっくりこれからするから。いろいろあって、先生にも聞いて欲しいんだ。」

「そうですね。ならとりあえず座りなさい？：て、人の家でこんな

こと言うのもなんですが」

“キルク先生”が、いたずらっぽく笑って言った。

とはいえ、見たところ椅子は4個しかない。私たちは今総勢5人なのだ。どうしようと思ったところに白波が当然のように立っていて、私に座れ、と顎で合図した。私が遠慮する間もなく白波は壁にもたれて腕と足を組み、“立っているなりにリラックス”体制を築いてしまったので、私は軽くお礼を言うதாக椅子に座ってしまった。

「さて、話を始める前に、まず知らない人同士が出会ったのですから自己紹介が先ですね。はじめまして。私はキルク・リータ。城下町のフィルユ学院で剣術を教えています。シュウイチとシラハ君は教え子でした」

でも、学生時代の先生とまだこんなに親しい縁があるなんて、少なくとも地球では珍しい。

「俺はニトロ・ハルティロイ。肩書きはキルクと一緒にだ」
柔らかい“キルク先生”の声に比べ、“ニトロ先生”は幾分鋭い印象の声だった。

それに“ニトロ先生”ならともかく、筋肉も闘争本能もなさそうな“キルク先生”が剣術の先生なんて不思議な感じだった。

さて相手が名乗ったということは、こちら名乗らなければならぬ。

「私は、真田桂と言います。よろしくお願いします」

「サナダさんですか。こちらこそよろしくお願いします」

「よろしくな」

自己紹介が済んだのだから、とうとう本題に入るのだろう。私は、音を立てない程度に唾を飲み込んだ。本当にこれまで特にわけも分からずやってきたが、とうとう知るときが来たのだ。

「ん〜で、どこから話すよ？しらびょん」

秀一が割と真剣な顔で、それでも軽口をたたいた。白波の顔の筋肉がピクッと動いた。

「その気持ち悪いの、やめろ。：まず、地球とルーステラについて話さなければいけないだろう」

「そうそう。あのな、キルク先生、ニトロ先生。」

ぐっと秀一の顔が真面目になった。何、こんな顔も出来るんじゃない。

「信じてくれている方が無理な話だろうが、先生たちだから、話す。：ていうか、この事を俺たちだけの秘密にして何とかしていく自信が無いっていうのが正直なところなんだけどな」

「はい、何でしょう」

先生（私にとっては先生ではないが）はまだケロッとした感じだ。

「俺と白波は学生するとき、いろんな魔法を編み出す遊びに一番熱中してた。どっちがどれだけ凄い魔法作れるか競ったりな：てケイは魔法わかんねーか。」

ちょうど隣の席に座っていた秀一が首を90度曲げてこちらを見た。魔法って。そりゃわかるかわかんないかって言われたら分かるけど、でも分かんないっていうか：。普通にゲームとか漫画とかに出てくる“アレ”なのだろうか？

「：まさか、あの炎出したり雷落したりとかの、アレ？」

秀一が驚いた顔をした。

「どうして知ってるんだ？こっち来てから見たのか？」

そういえばリップに会った時、勝手に魔導士と聞いてそっちを考えていたけれど、まさかゲームとかバーチャルじゃないんだから、そんな確証全然無かったわけだ。

でも今の秀一のリアクションからすると、私の想像（というか既成の知識）は合っているらしい。

：はあ！？そんなのアリか？？これじゃまるっきりファンタジーじゃないか。

「あ、ていうか、地球では“魔法”って架空の世界のお話で：、本当にはありっこないけどみんな知ってるの」

「：なるほど：。でもそういうことがあっても、おかしくないかも

知らない」

白波と秀一が考え込む。そこに、“ニトロ先生”が口を挟んだ。

「なあ。さっきから聞いてるとどうもそのサナダって子はチキユウってところから来たような感じなんだが、そりゃどこだ？」

ああ、と秀一が向かいに座る先生2人に視線を戻した。

「そう、それで俺らが競って魔法を作っていた頃、白波だったか？が、“同じこの場所でも違う可能性で発展したところに、魔法で行けるかもしれない”て言い出した。」

「それで、研究の末俺たちがたどり着いた所が、地球でした」
横から白波が付け足した。

「……………」

沈黙。というより、私が積極的に沈黙に加担したというか。

ええと、つまり。地球もルーステラも、もともとは同じって事なのだろうか。だからほとんど似ていて、言葉も同じだったりするのだろうか？

…ん？さすがに言葉は同じにならない気がする。それにそもそもが地球と同じこの土の上で魔法なんてけったいなこと出来ない、と思う。

…ああ、何かたった今お母さんのお腹から生まれた赤ん坊が、一見世界を手に入れたようでいて、かえって星の数より多く生まれた様々な疑問に困り果てているようだ。質問が多すぎて、何から口にすればいいのかさえ分かりかねる。

唯一安心できたのは、2人の先生方も私と同じような表情を浮かべていたことだった。

第五話

「…つまりチキユウとは、ルーステラの“もしかしたらそうになっていたかもしれない”という可能性のうちの1つということですか？」沈黙（といっても、30秒弱くらいだと思う、多分。）を断ち切ったのはキルク先生だった。

「そうです。最初ももっと沢山可能性があってもおかしくないと思っただけ、結果的に行くことが出来たのは、地球だけでした」最初からその質問が来ることが分かっていたかのように、スラスラとしかも即座に、白波は答えた。

「つまり、他の可能性では、ルーステラという星はとっくのとうに滅んでいたって事に落ち着いたんだよな、俺らの間では。」

秀一が白波を見やりながら言い、白波がうなずいた。

「その地球に行く魔法の方法を話し始めるとまた長くなりますが」

「いや、その説明は今はいいよ。」

ニトロはいったん制すると、それより、と続けた。

「まあチキユウにお前らが行けたとして、その女の子…サナダ、だっけか？は、どうしてルーステラにやってきたんだ？」

そうそう。それなのだ。それが聞きたい。

どうして秀一を呼ぶ声がしたのか、とか。

秀一と白波はもちろん知っているみたいだし。このままでは、自分が自分のことを知らないみたいで、いやだった。

「…そーなんだよな。こっからが本番なんだよ。」

どうせ知るのならさっさと知りたいのだが、秀一はバツが悪そうに口ごもると頭を掻いた。

「どうよ白波。これって最初はケイだけに教えるべきか？」

「…ああ。もしケイが差し障り無いと言うのであれば先生方にも言えればいいだろ」

白波も考えてから返した。

正直私は誰が聞いていようとあまり気にしない、と思う。よっぽどのことでない限り。

「つうわけで先生、ここまで話しといてわりいけど、ちょっとの間席はさせてくれねえか。」

いや。別に構わないから。ここまで聞かせておいて重要なところは教えないのもどうかだし。目の前の現実が変わらないなら、私はわざわざ気を使ってくれなくていい。

「いいよ、私は構わない。ここで話して。早く聞きたい」

「…でもなあ、これはさすがに」

「大丈夫だから」

秀一はうーん、と軽く唸って、白波とアイコンタクトもしつつ、でも最後は結局開き直ったようになって、

「……、じゃあ、後で後悔しても遅いぜ。恨むなよ」

「うん。恨まない。約束する」

私の返答を確認すると秀一は息を吐いて、また吸い、口を開いた。

「あのなあ、ケイはな」

ごくん。

「俺の隠し子だ」

は？

「つーのは冗談で」

私が思うより早く、白波の手が秀一の髪の毛を掴んでいた。

「…お前…」

慣れた手つきでぐいぐい引っ張る。いつものことなのだろうか。にしても痛そうだ…。

「ででで！悪かった！悪かったから引っ張るな、ハゲる！」

ふう、とあきらめたような浅いため息を吐くと白波は髪を離した。

「俺が言うか？」

「いや、俺でいい。」

秀一は白波を制すると改めて口を開いた。

「ケイ、はっきり言う。お前はな、」

一呼吸。

「俺の魔法で出来た命だ」

…何ですと。

瞬きを2回した。それ以上の脳みそは、無かった。

頭が回らないとはこの事を言うのか。

…いや、多分そうじゃない。私が何の感慨も抱けないのは、情報が少なすぎるからだ。

私が信じるとか信じないとかじゃない。それが、本当のことかどうかが、大事だ。

そう、きつと、それが本当のことで、変えられない事実とわかれれば、私は何の迷いも無くそれを受け入れることが出来る。多分、私はそういう人間だ。

何も言わない私を見て、秀一は仕方が無いという顔をする続けた。先生も何を言うでもなく黙っているようだった。

「魔法ってのはな、平たく言うと、その辺にふわふわしてる火の元とか水の元とかを火とか水とかに変えてやる事だ。ちよつと難しいが、物を作ることも出来る。…すごく頑張れば、人間も」

「ちよつと待て。理屈では確かに可能だろうがそんな事…」

黙っているかに見えたニトロ先生が口を挟んだ。

「大体実際そんなことしようと思ったら、人間を構成しているもの一つ一つを正確に作り出して、しかも一分の狂いも無く組み立てなければならぬだろう。それに、それで完全に人間の形に仕上がったとしても、それが心を持つかとなるとそりゃまた別の話だ」

「…ああ。まったくそのとおり。俺もそれを考え出した学生の時はずいぶん心を持った人間なんて魔法で出来るわけ無いと思った。けど、

ここに居るケイは確かにこの方法で生まれたんだ。」

当事者が言うのもなんだけれど、結構修羅場だった空気だ。ああ、無責任な話だけど、こういう空気は私は好きではない。

秀一は一回力を抜くように息を吐くと続けた。

「軽蔑するだろうとは思うさ。でも俺は、俺と白波は、先生だから話した。別にケイと俺らの間で秘密にしていたって構わないことだけれど」

黙って成り行きを見ていたキルク先生が口を開いた。

「あの、軽蔑とかは置いておいて、証拠はあるんでしょうか。何の考える材料も無く話を叩きつけられても信じるべきかわかりませんし」

秀一は毒を抜かれたような顔になった。

まさか秀一と白波が嘘を言っているようには見えないが、証拠がないと信じきれないのは事実だった。何せついさっきまで顔も知らない人間だったのだから。（実際何だかそうは思えないのだけれど。）それに証拠さえあれば、ちゃんと事実を事実と認めることも出来る。「…ああ、そうだよな。」

秀一は、白波が考えるときよくするように、でもそれよりもっとさりげなく眉を寄せると、すぐいつもの表情に戻り私のほうを見た。目が合った。しかも、座っているお陰でより近い視線で。青紫の瞳は、一見綺麗に澄んでいるけれど、潜っても潜っても底の見えない湖みたいで、何故か少し怖く感じた。

「…ケイ、びっくりすると思うけど我慢してくれな」

「え？」

言葉の意味が判るか判らないかの前に、私の視覚はさらさらと消えていく私の左肩を捉えていた。私は驚くよりも、身の凍るような恐怖を感じた。

私の肩は私の許可を得ずに消えていく。水蒸気が空気に溶けていくような自然さが不気味だ。まるで今まで真田桂をかたどっていたのが単なる偶然で、たった今、やっと元の姿へ戻ろうとしているよう

だ。

最初肩だったそれは既に肘まで到達し、次は手首に向かい着々と勢力を伸ばしていた。

私が消えていく。私の及ばないところで。不快だ。

「なっ、なにコレ」

やっと声を出すと、今のことはまるで幻のように左腕はもとに戻っていた。

「魔法を解きかけた」

…こうもあっさり言われると、へえ、そうですかとしか答えられなくなる。

でも、それじゃ済まない会話なのだから仕方ない。

「…じゃ全部魔法を解くと、私は消えちゃうの？」

「……ああ、まあ」

言いたくないけれど、事実だから言う、という口ぶりだった。

「確かに、今のは普通の魔法を解くときと同じでしたけど」

「魔法じゃ、人間は分解できないもんな」

先生たちも口々に言う。

ここまでくると、秀一が言ったことはほぼ100%本場で、私は秀一の魔法で出来ているということを認めなければならぬ。

……あれ？

もつとショックかと思ったけどそうでもない。

こんなものだろうか。

自分が、実は何だかよくわからないものだって知らされたのに。

「…いろいろあって、ケイは地球で作られた。っていうか、俺が作った。地球でも魔法は使えるらしい。まあもちろん気まぐれで作ったって事は無くて、そっちはそっちで事情はあったんだけど、そう

やってケイを置いてきたのがずっと気になってた。いつかもし見つけたら、きつと一回はこっちに連れてこようって思ってたんだよ。」その事情がなんなのか出来れば知りたいけれど、別に知ったところで何かが変わるでもなし。私はもう、すでにその辺はどうだってよくなっていた。

「ごめんな、ケイ。いきなりこんなこと言われて信じるのは無理だろうが、信じられなかったら地球に戻ることは出来る。そうしたら今までどおりの生活が出来る」

白波が幾分すまなさそうな顔で言った。

別に謝ることないんじゃない、と思った。

「うん、ま、しょーがないよ。気にしないで」

素直に口に出したつもりだった。

けれど、目の前の四人がたいそう驚いた顔でこっちを見、なかばフリーズしている。

：私はそんなに変なことを言ったのだろうか。

「“しょーがない” って：」

ニトロ先生がぼそりとこぼす。

「……ケイ、大物だ：。」

秀一がさも面白そうに、喉でクツクツと笑った。

：何か、釈然としない感はあるんだけど、場の空気が凄く和んだようだ。

「何だか」

キルク先生が言った。

「このままチキュウとやらに返してしまうには、惜しいような気がします」

それにニトロ先生がうなずいた。

「ああ。そりゃ本人が帰りたいってんなら別だけどな。居たらぜってえ面白いよ」

おいおい、私、面白がられてるよ。

「だってよ？どうするよ、ケイ。無理には止めねえけど、こっちに
残るってんなら歓迎するぜ」

ええっと。そんないきなり選択を迫られても。

そりゃ、今までの生活が嫌だったかっていわれれば、そんなわけな
いし。

むしろ適温なお風呂みたいで心地よかったっていうか。
でも。

「あの、地球には割といつでも戻れるんだよね…？」

「まあな。ただ地球はルーステラよりちよつと時間が早く流れたり、
かと思えばさっぱり遅くなったり、時間のムラはあるけど。でもそ
んなに大幅に変わることはない」

なら、今すぐ帰ることは無いんじゃないかと思う。

できればこれを、夢で終わらせたくない。せめて夢なら、もうちょ
っと見ていたい。

そう思った。

「じゃ、とりあえず、残ってみて…いいかな？」

「よし！よく言った。」

4人がそれぞれうれしそうな顔をしているのを見て、私もうれしく
なった。

第六話

その後、私と秀一と白波はニトロ先生の家を出てマークザスの城下町に戻った。私が微妙に息切らして歩く横をまるでエスカレーター（あの、空港にある真っ平らなヤツ）にでも乗っているようにスタスタ進む2人に、私は根本的な違いを感じた。

「なあ？ あんな事言っただいいけどな、事実上ケイは今家出状態だろ？ 流石にあんまりこっちに居すぎると、どんどん帰りにくくなるよな」

広場で立ち話状態。

「ああ：それに最近はルーステラに比べて地球は速く時が進む。こっちの1日が向こうで3日、ということもざらにある」

凄く抑えたトーンで白波が喋った。人通りが多いのを気にしてのとだろう。

「：そーいや、そうだったなあ。いまケイがこっちきて：4時間くらい経ってるか。じゃあ向こうじゃ丁度、あの夜が明けてさらに真ッ昼間くらいだろうな」

「それってマズいかも」

夜抜けして、ガッコさぼりっすか。

：ありえない。

いや、別にそこまで罪悪感は無いのだけれど、事後処理のことを思うと実に面倒くさい。

「すぐ帰るべきだ。と思う」

真面目な白波が真面目な（マトモな）意見を言う。

多分秀一も、ちょっと不真面目っぽいけれど、たぶん不誠実な人間ではない。

「だなあ。しかたねえ。また遊びに来な」

「…ウン。」

寂しい。

ハッと気づいたら私の部屋に居て、今までののは幻でしたゝなんてオチが簡単に想像ついて怖い。

でも、ほっとするかもしれない。

ああ、やっぱり現実じゃなかったんだ、って。

ほっとするけれど、寂しいと思う。

だって確かに経験して、確かにあったと思っていた時間が実は嘘だったなんて。

私が魔法で出来ていたとしても。

…こうやって生きた時間が嘘かもしれない事のほうが辛い。

でもきつと、「嘘だったんだよ」って言われたら「そうか」って割り切っちゃうんだろうなあ、私は。

頭は勝手に切り替わっちゃって、心が取り残される。そりゃ、心もノッてる時は完全に割り切れるんだけど。私が魔法で出来ていると言われた時はそうだった。

でも多分今度は違う。ルーステラが嘘だって言われたら私の心は納得しない。

「心配すんなって。いつでも会えるし」

秀一は、大体いつつも（少なくとも私と会ってからの短い間は）自信のありそうな顔をしていて、そして今もそうだった。

「…あのな、本当は謝りたかった。その時はガキで何にも考えてなかったけど、今にして思えば、俺がお前を作ったのは単なるエゴだった。」

小声でそんな事言われても、困る。そうやって謝るくらいならどうして私を作ったのか事情を教えて欲しい。いや、別にどうしても知りたいわけではないのだけど、どうせ謝られるんだったら事情を知

った上で謝りたい。そうやって相手が不納得の内に謝るのこそ、エゴのような気がする。

「いや、ガキなりに頭じゃわかってたが、何せガキだ。感情が勝ちまったんだ」

：もういいよ。私は何にも知らなくても楽しく生きてこれたし、運良く秀一たちにも会えた。知れただけで十分。

「ま、しょーがないよ」

「っはは、そうか。しょーがない、か。」

ちよつと皮肉っぽい笑い方が鼻につくけど：まあいいでしょう。

「じゃ、街外れの隠れ家。あそこなら音は抜けやすいが姿は隠せるからな、地球に行くにはうってつけなんだ。学生の時はおっぱらそこを使ってた」

ああ、私が目覚めたあの空き家のことか。

「：ついさっき、誰かが間違えて人を送り込んだところだな」

すかさず白波が突っ込む。でも怒っている感じでは、ない。

「あゝ、あれは悪かった。本当に。でも今まで帰る場所間違えたことなんか無かったし、さっきだっていつもと同じことしかしてないぜ。：でも、なんていうか凄く、魔法が使いにくかった。何かに反発されているみたいだった」

「そんな筈：いや、お前がそう言うならそうかも知れないが」

2人の会話は時として球速150キロでキャッチボールをしているようだけど、それだけお互いのことを信頼しているということなのだろう。

秀一と白波が先に歩いていなければ見つけることは出来ないであろうところに隠れ家はある。表通りから近いのだけど、普通に歩いていたらまず見当たらないような微妙な死角にあるのだ。

見上げると、ここに初めて来たとき見たのと同じアングルでマークザス城が見えた。最初は凄く遠く感じたけれど、今はそうでもない。ここに來てからせいぜい半日なのに、やけに長く感じた。いや、む

しろうずっと前からいるような。帰るべきところへ帰ってきたような
気さえ、する。

でもとりあえずは帰らなくちゃ。地球へ。

隠れ家に入ると街の音は：確かに筒抜けだった。音なら外だろうと
中だろうと関係ないような感じた。壁はしっかりした感じに見える
のだが。どうしてだろう…。

「じゃケイ、これで一生会えないでもないしな？一回会えたんだ。
何度でも会えるさ」

「うん。」

秀一は私がうなずいたのを見てニヤツと笑ってから（秀一の笑顔は
ニコ、というよりニヤ、という感じだ。）、何かに集中しているよ
うな顔になった。風が吹いているわけではないけれど、何だか空気
が動いている感じがする。ふと見ると白波もそういう顔になってい
た。

「目、閉じな、ケイ」

抑揚の無い声で言われて、私は素直に目を閉じた。

私の視界が黒一色になった刹那の事だ。足が地面から離れるような
感覚があった後、まるで精神が肉体の管轄下から引き剥がされたよ
うな、不思議な浮遊感が私を襲った。超高速で進んでいるのか、そ
れとも猛スピードで落下しているのか、はたまたどこにも移動せず
浮かんでいるだけなのか。私の五感では判らない。だからといって
第六感はない方なのでますますわからない。

来たときはこんな感じ、無かったと思う。ストンと落ちる感じがし
て、それでおしまいだった。

しばらくもみくちやにされた挙句、夢から覚めたように（といつて
も、私はちゃんとした夢は見たことが無いが）その感覚は消えた。
かわりに足が地面を踏みしめる感触が支配する。触覚に伴って聴覚、
視覚も戻った。私は目を開けた。

何度か目をこすった後見た風景は、
風景は。

机。本棚。フローリングの上に置かれたクッション。
キーホルダーのついた通学かばん。
壁に掛けられた制服。

紛れも無く私の部屋だった。

壁に掛けられた時計は昼の12時を指している。

やはりあれから12時間程度が経っているようだ。一瞬今までのことが幻だったように思えたが、視界に入る私の服は白波にもらったワンピースだった。

：帰ってきた。

寂しいような、懐かしいような。

ただそんなことを思っている暇は無い。：今は何とかして善後策を考えなくては。

とりあえず制服に着替えて、かばんを持つ。もしいつもどおりのローテーションで事が進んでいるなら、うちは今日この水曜日、お母さんは陶芸教室のために出かけている筈だ。しかし、(単なる無気力から)今まで何も悪いことをしていない私が夜家を抜け出すようなことをしたら、親は怒りさえせずむしろ刑事事件に巻き込まれたとも思うだろう。そうなるかと却って面倒だ。“なんちゃって大騒ぎ”はもっとも避けたい事態の一つである。

意を決して部屋のドアを開けると、音のなんともいえない残響から家は今空であることがわかった。つまりお母さんは居ない。行く場所は、陶芸教室か、それとも警察か。

トントンと足音の響くフロリングの廊下を歩いて居間に行くと、小さなメモ書きが残されていた。

『桂ちゃん 桂ちゃんもう高校生だから、お母さんはとりあえず心配しないで今日の夕方まで放っておくつもりです。でも今日の夕飯までに帰らず、連絡も無いようだったら桂ちゃんの身になにかあったんだらうね。警察に捜索願を出します。どちらにしても多少のお説教は覚悟しておくこと お母さん』

私はほっとため息を吐いた。説教、万歳。捜索願よりはずっとましだ。

お母さんの案外冷静な対応に安心して、私は家を出て学校へ向かった。

学校は、多少遠い。電車を使わなくてはならない。駅まで歩いて行けるのがせめてもの救いで、けれどただバスを使うほどではないという程度の道のりは歩くには少し消耗する。かばんが重い日はなおさらだ、うんざりを通り超えて自分の根性と体力の限界を試す試練にさえなる。だから普段は持つのさえ意味が無いような軽さにする。筆箱もシャープペンと消しゴム、それから一番好きな色のハイテックを一本だけしか入れない。大容量の筆箱はそれだけで結構な重さになるからだ。

そういうわけで今日もベッコベコなかばんをぶらぶらさせて歩く。

視界に駅が入ってきた。念のため定期を確認する。

いつも胸のポケットに：

ポケットに…。

ない！？…いや、かばんに入っていることもままある。一応調べて…。

私は立ち止まってかばんをあさりだした。

内ポケット、無し。筆箱の中、無し。ポーチの中、無し。畜生、どこだあゝゝ。

仕方が無い。一応家に戻って探してみるか。

私はかばんのチャックを閉めた。

「『我が主の孫』よ。お前はそのまま地球に安住できると思っているのか？」

「へ!？」

声だ。人の。背後から。

「あんたは地球の子でもなければ“ドロップ”の子でも無い。地球のぬるま湯に居ればやがて溶けきろう。しかし“ドロップ”の豪火にあっても魂を焼ききるだけだ。」

振り返った。布を深くかぶって顔の見えない人間がそこにはいた。身長は160センチそこそこといったところか。大きなマントのようなローブのような…、いやボロボロのようなもので全身をすっぽり覆い隠しているので体型は不明。声も、男かと言われれば男だけだ。ど女だと言われたらああ、女か…な音色と高さだ。

「扉は間もなく閉じられる。しかし選ぶ時間はある。隠された歪みを代償とした平穏な日々と、やがて終わる甘美な夢。だがきみは選択の自由を得ない。なぜならば、きみを夢へといざなうから」表情が見えないのでどういう気持ちで喋っているのか判らないが、とにかくただ朗々と、目の前の人物は言葉をつむぎだしていく。

怪しい宗教団体には見えな…くもないが多分違う。その関連の人だつたらとりあえず優しい言葉をかけてきてから執拗に勧誘してくるだろうし。しかしこの彼、狂人、に近い程度に変人なのは確かだ。

「ぼくの名は“ロクデナシ”。また会うだろう。」

「え…っ?？」

無意識のうちにした瞬きのその間かどうか知らないが、彼は姿を消した。煙さえ残さずに。

「……」

呆然と立ち尽くす私をある人はチラリと横目で伺い、またある人は完璧に無視の体制を取り通り過ぎてゆく。ああ、はいはい。私は確

かに変さ、こんな駅前で狐につままれたような顔して突っ立ってたらね。でも、あの預言者(?)の方が、ずっと変だった。そうでしょう？

…はあ……。

……定期探しに家に帰るか…。

第七話

「：こんなところに」

定期はすぐ見つかった。家に戻るまでもなかった。かばんの中のプリントとプリントの間のわずかな隙間に挟まっていたのだ。それにしてもなぜここに。日頃の不精がたたったとしか思えない。不幸中の幸いといえば、わざわざ家に帰ろうとして念のためもう一度かばんを調べたとき見つかったことだろうか。ともあれ私は大した手間もかけずすぐ電車に乗ることができたのだった。

電車はスカスカだった。いつもの朝はあんなに混むのに。それに乗客の層も大分違う。スーツと制服にみられる通勤&通学ラッシュの時とは打って変わって、昼時の車内は中年層から老年層にかけての特に女性が多い。何せ人が居ないので、座席の中でも一番端っこの手すりにもたれられるところに座ることが出来た。

丁度向かいに座っていたのは、口を見事にへの字に曲げて最高に不機嫌そうな50代くらいのオバサンだった。浅黄色くたるんだ頬にじつとりと油を滲ませている。また、私にはどこで買っているのか見当もつかない不思議に所帯臭いTシャツを着ていた。それには、妙に可愛くない犬がやけに大きくプリントされている。ハンドバッグは黒地に花柄というこれまた何ともオバハンくさい代物だった。と、ここまで観察したところでそのオバサンに上目遣いで睨まれて、私はそのオバサンから目をそらした。

そらした先はいつも誰かの背中だとかお腹だとか胸だとかにもみくちゃにされながら見る外の風景だった。いつもよりもクリアに見えてちよつとうれしい。

そういえば昨日までは、こんなに汚らしい街でもこれが現実かと思えば愛しくも感じたものだった。今だってそれは変わらない。で

も不思議な気分だ。これも確かに現実だが、ルーステラもまた紛れも無い現実だったのだ。どういう仕組みで地球とルーステラが繋がっているのかはわからないが。

秀一は、また遊びに來い、と言った。

どうやって？と、今私は思う。

また迎えに來てくれるのだろうか。

こんな小娘に会うために、大の大人が、予定を空けて？

現実的では、ない。

ではあれは幻と思ってこれからの一生を送れと？

だめだ。知ってしまった。脳みその中に、『ルーステラ』というタイトルのフォルダを作ってしまった。今更消去はできない。

現に今、私の行動目的は“次にルーステラに行くまでの時間を稼ぐ”ことになりつつあるのだ。気づいて自分でぎょつとしたが。

時は待たない。

あつという間についた学校では通常に行くよりやらなければならな
いことがあって面倒だった。まず職員室。担任には「腹痛がひどく
て…」と、一応の愛想笑いと申し訳なさそうな顔で告げた。担任は
「そう、じゃあ、次からは早くに連絡してね」というと頭を掻き、
遅刻届を提出するよう手短かに告げた。この担任は、必要以上に干渉
しないし気にかけるすぎないところが好きだ。そのかわり愉快でもな
いが。

「ガラッ。」

授業中のクラスにその音は必要以上の残響と緊張感を持って響いた。

全身の筋肉が収縮するような静けさのあと、事態をすばやく察した数人からの、ソツの無いあいさつ。そして上がる「どうしたの?」という気遣う声。私は出来る限り何でもなさそうな力の抜けた顔でへらっと笑うと、

「ちょっとお腹痛かったの」

「大丈夫?」

口々にそう言われて、ほっとするやら申し訳ないやら、複雑だ。

先生と二、三言話して、そしてそれで済んだ。また何事も無かったかのように授業は続いた。

「桂ちゃん、大丈夫?」

授業が終わってまっさきに話しかけてくれたのはやはり美由ちゃんだった。

「ああ、うん、ありがとう。もう平気。」

なつかしいぜ美由ちゃん。私は美由ちゃんの、笑うとちょっとへちやらけた顔になるところが好きだ。あと、つい触りたくなるようなサラサラの髪の毛も。

「でもよかったねえ。今日、抜き打ちで持ち物検査があったんだよ。佐古川君とか香織なんかは携帯とられちゃったみたい」

「えー、そんなのやるんだ」

「何かねえ、お財布盗られた人がいて、それでらしいよ。」

手元を意味も無いじくりながら美由ちゃんは言った。こうして美由ちゃんと話していると、ルーステラも何もかも夢だったんじゃないかと思えてくる。

平和な毎日。普遍的日々。

私はいつのまにか生まれて、そしてまたいつか死んでいく。この社会の中で。どの神も信じず、葬式だけ仏教に彩られながら。

悪くない。本当は悪くなんかない。これが普通だ。

当然の毎日を受け入れるということは、当然の結果としての未来も同時に受け入れているということにはならないか。そう、ならば、

ほんとうはルーステラなぞ要らないのではないのか??

私の頭はまるで何かを上から被せられたようだった。何もかもの説明がついたようで、しかし何か疑問の残るような。

「…桂ちゃん、やっぱりまだお腹痛い?」

「へ!?! え、何で?」

「だって一瞬すごい真顔だったもの」

それは“お腹の痛そうな”真顔だったのだろうか?思わず面白くな
って笑ってしまった。

「えゝ笑うところ? そこは。」

不服そうな反応に、私はまだ喉で笑いながらかぶりを振った。

「ううん、ごめん」

どうしてこんなに平和なんだろう。

どうしてこんなに幸せなんだろう。

どうして意味もなく笑っちゃうんだろう。

これが青春ってやつ?

何考えてるんだか

結局水曜日は部活のない美由ちゃんと途中まで帰った。

まだ日も傾いていない

「大分日が長くなったね」

「そうだね」

そんなことを話したような気がする。

「桂ちゃん! どこい…あら、学校行ったの?」

お母さんがあまり気にしないタチだというのは前々から承知だったが、まさかここまでとは。紺のブレザー姿の私を見るなりお母さんはいつもとさして変わらない態度に戻った。が、流石にそれもどうかと思ったようで、

「とりあえず何があったのかだけ教えて頂戴ね。突然居なくなっちゃってスゴクびっくりしたんだから。」

「ウン」

さてどうするか。まさか本当のことを言えるはずも無い。リビングに向かう廊下を、神妙な顔をして歩く私はお母さんの目にどう映っているのだろうか。適当な言い訳をひねり出そうとしているように見えていなければいいが。

鞆を床に置くと、リビングの椅子に座った。お母さんも座った。

「で、一体どこに行っていたの？ 友達のところ？」

「ううん」

「じゃあどこ」

「…その辺を、ぶらぶらと…。」

あながち、嘘でもない。

「ええ！？ その辺をぶらぶら！？？ 夜中に、一人で？？」

「…まあ…。」

お母さんは心底理解できないといった顔だ。

「嘘は言っていないわね？」

「うん。…私がこれ以上大それたこと、出来ると思う？」

「…それは思わないわ」

本心のようなだ。そんな信頼を勝ち得ていても、嬉しいような、むなしいような。

「にしてもよく一晩中もぶらぶらしてられたわねえ。…何か悩み事でもあるの？」

「え？ 別にこれといってないけど」

そう言うとは私は右側の髪の毛を耳にかけた。言葉を足すために息を吸う。

「ただ、なんとなく外に出たくなっちゃっただけなの。ごめんなさい」

チラリと目を見た。怒っては…いないかな。

「でも、こうして何も無かったからいいけどね？　夜は危険なんだから。突然刺されるかも知れないし、世の中には予想以上に変な人だっているのよ。わかってる？」

「うん、わかってると思うよ。…ごめん」

「わかってるならいいんだけど…何かあってからでは遅いんだからね。もうしないって約束しなさいね」

「うん、約束す…」

…見間違いだろうか。

お母さんの後ろに、何かが重なって見える。影？　いや、完璧に実体を伴っている。

人。そう、マントのような、ぼろ布のようなもので全身を覆った、

「約束はしないほうがいいね」

―ロクデナシ、…とかいったか？

顔さえも覆った布が少しだけズレて、口だけがちらりと覗いた。

「何故ならぼくが、きみを夢へといざなうから。言ったらう、また会うだろうと」

言いかけた言葉を飲み込んだままの私にお母さんは怪訝な顔を向けた。

お母さんには、見えて、いない？　聞こえても、いない？

「行くね？　行くだろう？」

ロクデナシは言うと同時に口の端を上げた。

「落ちてごらん、今度は体じゃなくて、心で落ちるんだよ。」

「桂ちゃん　どうしたの、虫でもいた？」

ロクデナシの声が何度も頭に響く。

お母さんの声がぼんやり聞こえる。

行かなくちゃ。
行かなくちゃ。

「ゴメン、お母さん、私、行くね」

ルーステラに行こう。

だから心の二階から落ちなくちゃ。

ルーステラに、落ちようー。

「桂ちゃん？ …桂ちゃん！！！！？？」

最後にお母さんの声が聞こえて、

私は確かに重力加速度を伴って落ちていく自分を感じた。

第八話

それは、意識を失いかけたときの、フツと魂が体から抜けるような感覚に似ていた。

ドサツ。

いや、実際「ゴッ」に近いだろうか。

「…ったア…」

きっと本当に落ちたのだ、どこかに。肩を主に、それと頭もちよつと打った。さすりながら上半身を起こす。

ここは、どこ？ 私は…真田桂…だな。

どうやら古い建物のようだ。天井が高い。家具も古めだけどすごくきれいだし、普通のおうちじゃないことは確かだろう。壁も床も石で、多分建物自体が石造り。

そういえば前来たとき行ったお城もこんな石で出来ていたような…。

「誰か居んのか??」

ギョッ。

反射的に心臓を縮ませたが、

どうも聞いたことのある声な気がする。

「……て、もしかして、ケイかよ」

声の方を見ると、肩に少し引っかかるくらいのサラサラ銀髪が場所によつては太陽の光を反射して、白い光を発していた。

秀一だ。この間とは違い、腰に剣を差していた。そうだ、確か騎士隊の隊長とか言っていた。

「…うん、そう」

我ながら間抜けな返事だ…。

秀一はずんずんとこちらに近づいてきた。そりゃあ警戒を怠らない小動物じゃないんだから、これから話す人とわざわざ距離をとる必要は無い。

「またどうして、それにどうやって、……いやこれはその際置いておくにしても、どーしてこんな所にいるんだ？」

こんな所、と言われるようなところなのだろうか。手段や動機を置いておいてまでして聞くほどの。

「ここは、どこ？」

座り込んだ私を見かねてか、秀一は私に向かって右手を差し出してきた。その手をこちらでも右手で握ると、ぐい、と引っ張り起こしてくれた。打った肩がまだ少し痛い、それはそれだ。立ち上がってすこし冷静になった私は、自分の服が紺色のブレザーから白波にもらったワンピースに変わっていることに気がついた。不思議だが、そんなことを気にしていたら身が持たなさそうなので考えるのをやめた。

「マークザス城だ」

「へ…？」

「だから、マークザス国の心臓、兼、俺の家。ついでにここは、広い広い城内の中の一部の、騎士隊長サマサマとその補佐の部屋な」兼、俺の家、っすか。ついでにサマサマ。

「いや私別にここに来たかったわけじゃなくて、ただたまたま落下地点がここだったというか…何というか…。」

「いいけどケイ、見つかったらヤバいどころじゃねえぞ？　まして国民でもないんだから」

「え」

私の顔が動揺に引き攣りかけるのを、秀一は目ざとくも気付いていた。

「そういえば昔、なんかの加減で城内に入っちゃった観光客がひとつとらえられて随分な目にあったことがあったな。偵察兵じゃなかった、留置所で：確か二週間？　疑いが晴れるまでが国際論争にまで発展して面倒だったの何の。ま、のんびりしてる国ならまだしもマークザスは敵も多いからな」

：からかっているようで現実味のある話だ。「確かに見つかったらやべーわこりゃ」という思いと、「何だ、秀一ったら、からかって」という思いがバームクーヘンのように何層にも何十層にも重なっていった。

しかし表面上は大してからかい甲斐の無い表情をしていたらしい。

「何だ、ケイは案外冷静だな。つまんねえの」

秀一は、まるで今まさにタピオカプリンを食べようとする、愛すべき姪っ子に「知ってるか？　タピオカってカエルのタマゴなんだぜ」と、とっておきの法螺を吹き、「キャツサバの根っこでしょう？

私知ってるから」といとも冷静に返されたときのような、落胆したような決まりの悪そうな顔をした。

「ねえ、でも、その話は本当なんですよ？」

私がそんな空気を吹き消すように言うと、秀一は、ああ、と答えた。「でもここにいる間はひとまず平気だ。護衛兵も隊長格の部屋にはそうそう入らないし」

さて、どうやら私にはすでに、この部屋から時計を探して時間を読もうとすることが出来るほど余裕があるらしい。小さな引き出し様の棚の上にあった置時計の針は、5時40分を指していた。すると地球に帰って学校に行ってきたのに、こちらではせいぜい2時間しか過ぎていないらしい。：驚異だ。

それにしても確かにここに居るうちはいいかもしれないが、いつまでもこうしているわけにはいかない。

「脱出法とか…あるの？」

忍者屋敷じゃあるまいしね。

秀一は、うーん、と唸った。そして、

「ねえな」

「…そう」

秀一で分からなかったら、他の誰に分かるのだろう。と、ここまで彼のことを信用しきるのもどうかとは思うが、抜け道だとか脱出ルートとか、やけに詳しそうだし、秀一は。根拠ないけど。

「でも、ケイ一人でじゃ無理かも知れないが、内部に共犯者が居るんだから不可能じゃないさ。」

共犯者。

「共犯者、秀一？」

「っそ。それ以外誰かいるか？ 白波？」

何かを小馬鹿にしたようなニヒル（かどうかは甚だ疑問だが）な笑みと共に投げかけられれば。

失礼かもしれないが、白波に任せたら、確かに一生懸命やってくれそうだけど万一しくじる可能性も無きにしも非ず、だ。しかしその点秀一なら、ニヤニヤ笑いながらあっさりこなしてしまいそうだ。他のことならともかく、こういうことにおいては特に。

「…秀一だね」

こうしてみると、意外と秀一も頼りがいがあるのかも、…、しれない。

「だろ、じゃこの共犯者サマに任せとけ？…にしても共犯者ってなんかい響きだな。」

「それって、主犯は私になるの？」

「たりめえだろ。にしても相棒さんよ、俺の魔法なしでどうやってルーステラに来れたんだ？ まさかこんなに早く再会するとはさすがに思ってたぜ」

「あのね、それは…。」

帰ったとき時刻はやはり昼ごろで、口裏あわせに神経を使ったこと。

“ロクデナシ”のこと。

ルーステラに“落ちた”こと。

私は帰ってからあったことを手短かに話した。

「…ふーん、そーか…」

秀一は話を存外真剣に聞いて、相槌を打ち、時折考えるような顔をした。

「私は魔法なんて使えないでしょ？ でも何故かあの時、すごく確信があったの。ルーステラに行ける、って。その“ロクデナシ”が何かしたんだと思う？」

あのときの私は催眠術にかかったように冷静でなかったので、今になって浮かんた疑問を秀一にぶつけてみた。

「そうだな、それしかないだろ。俺たちのほかに地球に行けるやつが居るとは知らなかったが…、にしても変わった名前だなく。」

「だよね、ロクデナシなんて縁起でもない名前、つける親、いないよね」

私は笑いながら言った。どうせ偽名なのはわかっていたが。

そのとき、不思議なことに、秀一の顔が疑問に翳るのを私は見た。

「？ 確かに変な言葉の組み合わせだけど、縁起わりいか？」

「え？ だって…」

表情から見るに冗談ではなさそうだ。しかし秀一の語彙力が平均以下とは思われにくい。

「ロクデナシ、ロクデナシ…。思いつかねえな。そんなよくないイメージあったか？」

もしかしたら。いや、もしかしたらだけど。

ルーステラでは、ロクデナシという単語に意味が存在しないとしたら？？

「ろくでなしって、ろくでもないやつみたいな感じで、役に立た

ない奴とかしょうもない奴みたいなニュアンスだよ。：言わない？」
「言わないな。方言でもないし。もしかしたら地球でしか言わないのかね？」

秀一は言葉を切った。訝しげな顔をしていた。

数秒目が合って、私たちはどちらからともなく口を開いた。

「てことはだ、そのロクデナシとやら」

「：地球とも、関係があるの？？」

お互い考えていたことが一緒だったことを確認したら、あとは堰を切ったようだった。

「でも、ロクデナシって名前は地球の言葉を適当につけただけかも」

「じゃあ、そんな意味深な事言うか？？ 預言者じゃあるまいし。」

『ぼくがきみを夢へいざなう』だっけか」

「確かになんていうか、若手の劇団員みたいなしゃべり方だったけど」

「ただのサイコさん説も捨てきれないな」

やたらまじめな顔で言われて、私はつい吹き出してしまった。

「おいおい、冗談じゃねーからな、あんまり悲観しすぎちゃドツボにはまるぜ。樂觀しすぎても自爆するけどな」

でもサイコさんはないんじゃない、と思ったけれど別に口には出さなかった。

「だけどどっちにしても私は魔法使えないんだから、ロクデナシが関わっていることは確かだよな」

まあ、なあ：と秀一が相槌を打った瞬間、私はゾクッと、寒気のようなものを感じた。

：空気の質が変わっている。時間が止まっているようだ。

「そう、ぼくが手伝った。でも、きみは自分でここにきた。」

ロクデナシだ。

ボロボロの布かマントのようなもので身を覆い、顔にも深い影が落ちて
いる。わずかに顎が見えるに過ぎない。私は正直驚いた。

秀一も、さっき私を発見したときよりずっと驚いた顔をしていた。

湖のような青紫の瞳が、無風の水面に小石を投げ込まれたように波紋を
広げて光った。

「はじめましてだ、神の息子。もう一人はどうした？」

ロクデナシは秀一の方を向いて言った。神の息子？ 一体どうい
う事だ。

秀一は答えない。黙っている。しかし今の言葉の意味を知っている
ようにも見えにくい。

「まあいい。扉は閉じた。どう起きようとあがいても、夢から決し
て醒められない。しかし甘美な夢の外、時は流れて止まらない。夢
見る人が死ぬ前に、夢を誰かに譲りなさい。すれば夢は永遠を手に
するだろう」

劇の台詞を詠み上げているようだ。相変わらず、声からも性別が読
めない。

「つまりは、夢と現実の相の子の、その少女を現実に戻そうと思
うということだね。しようとしてもできないだろうが」

私のほうを向いているということは、“その少女”というのは私の
ことなのだろうか。秀一は既にポケットに手をつっ込んで、片足に体
重をかけている。さすが大物だ。

「それ以前、顔も見せねえであんた一体何者……」

「!？」

不意に、私の意識はこの部屋の扉に集中した。音を立てて、両開
きの木製ドアが開いたのだ。

「シュウ、何だ、誰か来てるのか？」

白波だ。心強いというか、間が絶妙というか。

白波が状況を飲み込んで驚く時間も与えず、ロクデナシが口火を切
った。

「来たか、もう一人の神の息子。用件は伝えたからね、またしばらく会うこともあるまい。しかし、いずれまた、運命の流れるときに……。」

と、私が無意識にした瞬きの間だろうか、その謎の男(?)はすっかり姿を消していた。

「……妙な物が見えたり聞こえたりするほど働き倒した覚えはないんだが……。」

と、白波。

「いや、働いてない俺が見えたり聞こえたりしたんだ、せいぜいが妖精さんか悪戯好きの化け猫ってところだろ」

「おかしいな、私、靈感皆無なんだけど」

……。

ここで少し大げさな言い方をすれば、“額から汗タラーン”といったところだろう。何ともギャグチックな沈黙が流れる。そういえば、妖精見るのって靈感必要なの？ ないだろうなあ。

「そうだ白波、ちょっとこいつ地球にもどしてみるから、成功しそうに無かったら手伝え」

「え？」

ねじを巻きなおしたような機敏さで秀一は思いついたように言うと、まだ扉の近くにいた白波を呼び寄せるようなジェスチャーをした。

「証拠をとらにゃ、信じることも腹を立てることもできねえ」

事情を知らない白波は、もちろんそんな一言では何が何だかわからない。

白波が私を見た。私は白波を見ていたので目が合った。白波は概ね無表情だ。

それが「おや？」という顔になったのは、一瞬が過ぎた後だった。

「何でケイがいる？」

「え？」

今度は秀一がとまどう番だ。したたかに白波の目を凝視したまま吹き出すと、

「ん前さあ……何ていうか……あゝダメ、面白すぎる……つくく……」
「シューイチさん？ 笑いすぎて何かに寄りかかりたい気持ちはわからなくも無いけれど、よりによって私の肩を使わないでくれません？ その右腕とそれにうずめた頭、意外と（いや、予想通り？）重いんですけど。」

ああ、そうか、中身がぎっしり詰まってらっしゃるからしょうがないのか。はああ。

「……はゝ。あああ。わりいな、何かシリアスなのが続いたからさ、白波の心の美しさに俺ほっとしちまって」

もっぱら人をからかうために使用されているらしいぎっしり頭蓋骨がやっとな離れていった。

「……喧嘩も商品と同じだな、あまり激安だと粗悪品が多いらしい」
アドリブにしてはとても気の利いた買い言葉だ。秀一の口の端が何か言いたげに動いたが、すんでの所で思いとどまったようだ。

「だあから悪かった、って。それよりだなく、……」

秀一は、これまでのいきさつを簡単に、しかし的確に説明した。

「……と、こんなもんかな。ケイ、何か話し忘れてること、ねえか？」

「うん、ないと思う」

「そういうわけでだな、来た早々だけどロクデナシとやらの言っていたことを確かめるためにケイを地球に帰そう、ってわけだ」

白波は頷いた。

「これで帰せなかったら、なんだか悔しいな」

「そーだよな。悔しいよな。だから俺がもし失敗しそうだったら、手助けしてくれ」

白波の首がもう一度縦に振られるのを見ると、秀一は私の方を向いた。

「でもケイは来たくて来たから、こんなところであっさり帰りたくないだろ？」

そう、そうなのだ。だってお母さんの目の前でサックリ消えておいて、何事も無かったかのように戻ったりした日にはちよつとしたテレビ番組に取り上げられても不思議じゃない。ああ、それを言い出したら家へは二度と帰れないのかもしれない。誰も知らない国で新たな人生を踏み出すという手も無きにしも非ずだが、それではルーステラに居るのと根本的に変わらない。

……。

…もしかして私、はやまりすぎた？

「帰りたくないけど帰りたい、けど帰れない…ような…」
カントリーロードかよ。

「ん、そういうわけで、帰せることを確認したら、もいちどこっちに戻す！ これで行くか」

言いながら指をパキポキやっている。魔法に関節って関係あるのか？
「覚えてるよな、目、閉じてくれ」

瞼を下ろすと暗闇が広がっていた。完璧な黒色だ。目の前の秀一の影くらい見えたっていいのに。

……これじゃまるで、一人ぼっちだ。

第九話

ぐん、と足が地面から引きずられる感覚だ。秀一の魔法が始まった。目の前が黒から白に変わる。急に立ち上がったときに眩暈がするようなああの感じだ。何かにつかまりたいがそういうわけにも行かない。ただ周りの空気をかき回されているようだ。

いやな予感がする。どうもこの魔法は成功しないように思う。だって最初のときは何の違和感も無く、二階から飛び降りるくらいの感覚だった。次のときも、きりもみって感じだったけど一応は落ちている感覚があった。でも今はくらくらするだけだ。ただ、白と黒のマーブルが、混ざることとはせずに目の前を流れていく。

白と黒の中から景色が浮かんできた。

目をつぶったままなのに、妙だ。

パイプベッドと白いシーツ、白い壁……。そこに立っているのは、ぼやけた色のボロ布を纏った人間：ロクデナシ？

『だから扉は閉じたって言ったじゃあないか。君はそっちにいてもらうんだ。半分は向こうのものだから』

半分？

すると突然、テレビを消されたように、全てが唐突に中断された。パッと視覚も意識も遮断され、次に目覚めるまで私の人生は一時停止されたようになった。

急に魂が体に戻ったように感じられた。

足も動かせそうだし、手もグーパーするのに差し支えなさそうだ。ようやくこの体は私の意識の管轄下に入ったようだ。瞼もどうやら押し開けられるようなので、そうしたいようにしてみた。

光がどうにもまぶしいが、多分太陽だけではない。この雪かツララかのような白銀で、思い当たるものとしては、そう、秀一の髪の毛だ。

「ケイ！　くそ、すまん。どこも痛いところ、ないか？」

やはり魔法は成功しなかったようだ。風景は目を閉じる前と何ら変わらない。

「大丈夫、何もなかったから」

なんとなく手ぐしで髪を直してみる。

「そうか…」

「結局、駄目だったか」

と、白波。

「チ、裏で手え引かれているようでどうも気に入わねえな」

私もまったくもって気に食わない。知らないところで事に巻き込まれているのはイライラすること限らない。…あくもう。

「それは確かにそうなんだが、どうするんだ？　ケイは」

そういえばロクデナシが出てくるまでは脱出バナシだけだったのだ。目の前は白黒になるわ、くらくらするわで、もはや脱出に使う頭もないのだけれど公開処刑がいやだったら避けて通るわけにはいいかな。

秀一は頭を搔くと、誰とも目をあわずに口を開いた。

「ん、まゝ何ていうか…確っ実に逃げおおせられる方法は知ってるんだが…」

「知ってるの!？」

「俺は知らなかったぞ。何か方法があったのか？」

白波はいたって真面目顔だ。

—ああ、これだから白波には知られたくなかったんだ
秀一が小さくつぶやいたのを、聞き逃すはずがない。

「そういえば秀一、いつの間にか城を抜け出してサボっているときは一体どこから出ていたんだ？」

彼のコメカミに怒りマークが浮かんでいるのは見間違いではないだろう。

秀一は憎憎しげに小さく舌打ちをした。

「俺の寝室のベッドの横の壁のブロックをどかすと……いや、説明すると案外長いな……あゝ、とにかくだ、そう、ここでケイを路頭に迷わせたところでどうなる？　俺とお前が力を合わせて出来なかったことだ、大変申し訳ないがはつきり言っただけで地球に帰れないだろ？　だったらその間の寝床と生活を保障せにゃならん」

「ごまかす段になるとまともなことをいうな、こいつ……」

「でも本当だろ」

「まあ……そうだな、多少のコネクションがあつて、生活が保障されていて、歳相応の……といったら」

「白波よ、俺は一箇所思い当たるところがある」

「奇遇だな、俺もだ」

二人は目を見合わせるとにんまり（主に秀一が）した。

「な、なに？　どこ、そこ？」

なんだか不安になってあわてて聞いたら、二人はさっそこちらを見た。

「ケイ、学校、行くか？」

え？

第十話

D R O P

第10話

字紀 彦助

『キルク先生の家、ここに地図書いたけど…わかるか？ ま、大丈夫だよな、多分。ここに行って、先生にこの手紙を渡してくれ。あとは何とかしてくれるさ』

と言われて、私は夕暮れの中城下町をしばらく歩き回った。

白波の前で城の脱出方法をバラすのを秀一は大分渋ったが、結局教えてくれた。最後の抵抗のつもりか私にはヒソヒソ声で教えてきたんだけど、抜け出す現場を見られたわけだから結果的に無駄だったと思う。

しかしまた、その抜け道が面白いくらいに複雑だった。

『俺の寝室のベッドの横の壁のブロックをずらすと出来る穴から入ったところにある物置部屋の棚の奥に作った隠し扉の向こうにある今は使われていない守衛室の、根性でこじ開けた溶接で閉じられて

いた地下通路を通った先にある、一見突き当たりに思える場所に何気なく落ちている木彫りの猫を、ただの凹みに見える隙間に差し込むと開く隠し扉を通り抜ける』

忠実に行くとそこは城の敷地を完全に出た城下町だった。

けど今頃はあの完璧な抜け道も、白波の手によって完全封鎖されているかもしれない。けど、秀一のうまい口車に乗せられて結局九死に一生を得ている可能性も、ある。どちらにしても秀一はあまりサボれなくなったに違いない。ちよつと悪いなあとも思うけど、白波は大分楽になるのかもしれない。

あの二人は不思議だ。兄弟みたいに仲がいいのに、お互いを見る目は意外と厳しいような気がする。この違和感がなんなのか、よく分からない。

さて、地図と街をかわりばんこに睨み付けながら何とかたどり着いたキルク先生の家は城下町の住宅街のようなどころの内の一軒で、かわいらしい感じの二階建てだった。玄関のドアまで三段くらいの階段がある。淡い色の花が植わっていて、よく手入れをされた感じに生き生きしていた。

たどり着いたけど、何だかどうしたらいいかかわからない。チャイムがあるわけでもないし、ほとんど初対面の人にこういう風に訪ねてきたのは初めて。

すると、そこに一人の小さな女の子が駆けて来て、キルク先生の家

のドアを開けた。

茶色のワンピース、首元は白い丸襟で縁取られている。ワイシャツ

の上にワンピースを着ているのだろう。革で出来たバッグを肩からかけていた。出で立ちは私立の小学生という感じ。透き通るようなミルクティー色の髪の毛が肩を擦って揺れている。背中にちょこんと小さくてかわいらしい白い羽根が生えていた。ほんの数日前の私なら飾りか何かだと思うだろうけど、ニトロ先生や道すがら見た人々ですっかり慣れてしまった。

「ただいまー！」

小学校1、2年生くらいに見えるその女の子は家の中に向かって元気にそう言った。そして、私のほうを振り向いた。私はちよつとだけ身構えた。

「おきゃくさまですか？」

…うわぁ…！ 思わず心の中で溜息が漏れた。

天使の微笑みというのだろうか、ブルーの中にブラウンの筋が入った瞳がくりくりしていて可愛い。ほっぺもいかにも柔らかそう。こんなに可愛い子供っているんだ…と内心うっとりする。そういえばどこか、顔立ちや立ち振る舞いに見覚えたところがある。

あ、そうだ。キルク先生だ。

この子はキルク先生に似ている。もしかしたら娘さんかもしれない。

「あの…キルク先生、いるかな？」

少し声がかすれたかもしれない。なさけない。初対面の女の子に話しかけるのにこんなに緊張するなんて。

女の子は家の中に頭だけつつこんでこう言った。

「おかーさん！ おとーさん、いるー？」

ああ、やっぱり娘さんだったんだ…と思っていたと、家の中から足音がして、玄関口に一人の女の人が出てきた。

こげ茶色の髪を、たぶん後ろで一つに結んでいる。エプロンで拭っている手は細くて、骨が繊細に浮いている。キルク先生と同じくらいの歳だと思うけど、清潔できれいなひとだった。左目の下にはほ

くろがあつて、首が細い。

「あら、フィルユの生徒さん？」

フィルユ？ フィルユって何？

「あ、えっと…」

「そうなの？ 会ったこと、ないね」

女の子が私の服の腰あたりを掴んだ。

「ええ、私、この国に来たばかりで…」

女の人は心得たというようにやさしく微笑んだ。

「あらそうなの、ごめんなさいね、あの人そろそろ帰ってくるはずなのよ。どうぞ上がって？」

前髪を掻くしぐさが女らしくてすてきなあ…なんて現実逃避している間に、女の子が私の服をひっぱって家の中に招き入れた。

「おねえちゃん、行こう」

「う、うん…じゃあすみません、おじゃまします」

靴を脱ぎかけて、脱がなくていいことに気がついた。

床は木の板張りで、歩いて立つ音が何とも言えず優しい。家の中はなんだかほっとする臭いで包まれていた。ポプリとかそういうものじゃない。生活臭と言ってしまえばなんだか嫌な響きになってしまったけれども、そう言うしかない。

「どうぞ、好きにかけて下さいな」

女の人が台所から顔だけこちらを向いてそう言った。女の子が、きれいな刺繍のされた布がかけられているソファを指差した。

「座ろう？」

「うん」

「チノは着替えてきちやいなさいよ」

「はぁーい」

チノって言うのかな？ この子。いつか見たミュージカルにそんな名前のギャングが出てきたような気がするけれど、女の子の名前として聞いても可愛い感じだと思った。

タンタンと階段を昇る音も、少し不揃いなリズムが子供っぽくて

可愛い。

それからどれくらい経ったのか、たぶんそんなに経っていないの
だろうけど、奥さんが出してくれたいい香りのお茶（嗅いだことも
ない香りだった。少し香ばしくて、木のように深くてどこか甘い匂
い。）を飲んでいたら、玄関のドアが開く音がした。ほどなく、居
間のドアが開いた。私は、我ながら不自然なくらいに勢いよく、立
ち上がった。

「ただいま」

やっぱりキルク先生だった。ちよつと疲れているように見えるけ
ど、確かにキルク先生だ。

「…あれ」

キルク先生はすぐ私に気づき、意外そうな顔をした。当たり前とい
えば、もちろん当たり前なのだけど、それでもその後の対応はいか
にも大人らしく落ち着いていてさすがだった。

「やあ、よくここがわかりましたね。シュウイチから聞いたのかな」
まずは地顔なのではと思われるくらいに自然で穏やかな笑顔を浮か
べる。

「はい、あの、急にお邪魔して、すみません」

私はこういうときの礼儀をよく知らないことに気づいてびくびく
した。

何で私は、こんなことも知らないんだろう。

「いいえ、構わないですよ。うちは誰も来ない日のほうが珍しい
くらいですから」

キルク先生はそんな私の不安に気づいてか、とても優しい。

キルク先生は私が突然一人で来たことにもちろん驚いていたが、秀
一と白波から預かってきた手紙を読むと、快く力を貸すと言ってく

れた。

手紙には、私を学校に入れるのを手伝ってほしいと書いてあったらしい。そしてその学校というのが、秀一と白波の出身校であり、ニトロ先生とキルク先生の職場である学校で、名前はフィルユ学院とこののだそう。それで、さっき奥さんがフィルユと言った意味がわかった。

「へえ、ケイちゃんは、今度フィルユに入るのね」

奥さんともすっかり仲良くなった。そうそう、名前はアンゼさんと言うのだそう。明るくて、でも女らしいきれいな人。こんな三十代になってみたいと思えてくる。

「わたしと一緒にだね！」

チノちゃんが言う。

「そうですね、参りましたね、ケイの学年じゃ私の受け持ちですよ」キルク先生がちよっと困ったように笑いながら言った。さっきから何か書類のようなものを書いている。それにしてもキルク先生は家族相手でもこの調子らしい。

「あらちようどいいじゃない、マークザスに來たばかりでいろいろ知らないこともあるでしょうに」

アンゼさんは、ねえ、と私に言った。

「はい：うれしいです、先生に直接教えてもらえて」

「しかし時が経つのは早いですね。つい昨日までシュウイチもこれくらいだったような気がしますよ」

「そうねえ」

2人はくすくす笑った。目を見合わせ、更に嘖き出した。
「？」

私が不思議に思っていると、アンゼさんは私を見てにっこりした。「いいえ、シュウイチ君：今は、騎士隊の隊長閣下だけど：が、うちにいたときの事を思い出したのよ」

「え！？」 秀一がここにいたことがあったんですか？」

「そう、フィルユの最後の2学年は専門課程と言って、志望する職

種毎にクラスを細かく分けるんです。シュウイチが志望した騎士課程は一人の教官に対し一人の生徒、つまり個人指導でした。そして彼の担当教官になったのが私だったので、彼にはここに住みこんでもらって2年間修行をしたんですよ」

キルク先生は書類を書き終えたようで、見たことのない形をしたペン先のついた黒いペンを置いた。

「あの、秀一はどんな生徒だったんですか？」

私は好奇心を抑え切れなくて聞いてみた。とても面白い話が聞けそうな気がした。

「そりゃあ、もう」

アンゼさんとキルク先生が目を見合わせる。

「フィルユ始まって以来の大問題児でしたよ」

いたずらっぽい微笑を湛えてキルク先生が言う。

「小さいうちから、破った校則の数は群を抜いていました。寮の門限を破ることは常時でしたし、行ってはならないと言った場所には必ず出向き、触ってはならないと言ったものは必ず触り、やってはならないと言ったことは必ずやって下さったものです」

秀一らしいといえば秀一らしい。でも、秀一はそういう馬鹿はあまり好きじゃなさそうにも思う。

「例えば、どんなことをしてかしてたんですか？」

「彼の数々の伝説的所業の内のほんの一つを挙げれば、10年前に城下町で連続通り魔が出た時、フィルユではしばらく生徒の外出を禁止しました。当然の話です。当時は剣術教官をはじめとして多くの教官が犯人搜索の協力をしたものです。そんなとき、シュウイチが寮に居ないという知らせを受けて、学校は上を下への大騒ぎになりました。私もニトロ先生も必死で彼を探しました。もしや犯人の新しい犠牲者になってしまったのでは、と冷や汗を流していたとき、何と彼は悠然と帰って来たんです。縛り上げられた通り魔を携えてね」

10年前…ということは大体13歳ということかな。私より2歳

も小さいときにそんなことをやらかすなんて信じられない。

「彼は要するに、子供のうちから、小さな大人だったんです。『子供だから』やってはならない、と禁止することは彼にとって非常にナンセンスなことでした。不幸なことに、大人と同じに頭が働き、大人と同じ力があって、大人と変わらず道理をわきまえている子供は、彼のほかに居なかったのです。生まれてから十分な時間が経っていないというそれだけのことで行動を制限されるのは、彼にとって苦痛だったのでしょう」

そこまで紙の上を見るともなしに見ながら言った先生は、私のほうへ視線を移して柔らかに微笑った。

アンゼさんが、そうね、と小さく相槌を打った。

「さあ、こうして書類を揃えてもまだ入学できるとは限りません。明日に備えてゆっくり休まなくては。ケイは、他に泊まる場所は無いんですよね？」

「は、はい」

「おねーちゃん泊まって行くのー!？」

やったあ、とチノちゃんが飛び跳ねんばかりに喜んでくれた。

私はそれも嬉しかったけれど、キルク先生の「入学できるとは限らない」というくだりが気になって気になって、心からそれに笑い返すことができなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4101a/>

DROP

2010年10月26日05時03分発行